

ることはなかったが、広く国民に愛唱された。童謡以外の作品は歌曲『小諸なる古城のほとり』、歌劇『西浦の神』、『月姫』などがある。著書に『作曲の初歩』（一九三六）があり、作品集として『弘田龍太郎作品集』全三巻（五九）が編まれている。（田甫桂三）

びわの実学校 びわのみ がっこう 童話雑誌。昭和の「赤い鳥」た
らんとして、坪田譲治が主宰、創刊した。一九六三年
（昭三八）一〇月創刊。譲治七三歳の時である。創刊号には
宮口しづえ、棕鳩十、與田準一などのベテランに並ん
で、松谷みよ子『モモちゃん動物園へ行く』、佐藤暁（さ
とる）『四角い虫のはなし』、前川康男『ヤン』（連載第
一回）、庄野英二『水の上のカンポン』などの作品が出
ている。「びわの実学校」が生んだ童話作家としては、
このほかに今西祐行、大石真、大川悦生、あまきみ
こ、寺村輝夫、宮川ひろ、竹崎有斐、高橋健、砂田弘
など、現代日本の児童文学界のほぼ主流を成す作家た
ちの名をあげることができる。昭和前期に童話作家と
して名を成した坪田譲治が、名伯楽として戦後児童文
学史上に残した大きな功績といえる。譲治歿後、同誌
は先にあげた同人たちの手に引き継がれたが、八六年
四月、第一三四号をもって終刊となった。表紙絵は創
刊号以来、終始版画家の山高登が担当した。八六年秋
より第二期「びわの実学校」が季刊として再出発した。
（小西正保）

フ

フアジェエフ **アレクサンドル・А** **Александр**
Александрович Фадеев 一九〇一—五六 ソビエトの作
家。職業革命家の家に生まれ、少年時代から極東の革
命運動に参加する。この体験をもとに描いた『*Проп-
тив течения* 流れに抗して』（一九三三）や『*氾濫*』（二
四）、続く『*壊滅*』（二七）で、プロレタリア作家の中心
的存在となる。児童文学作品としては、第二次世界大
戦中のクラスノドン地方の少年少女たちの地下抵抗組
織の活躍を実話を下敷きに描いた『*若き親衛隊*』（四五）
がとくに有名である。（中込光子）

フアージエン **エリナー Eleanor Farjeon** 一八八
一—一九六五 イギリスの詩人、童話作家、随筆家。ト
ムフルの筆名でも多数の軽妙な詩を書く。少女期か
ら読書に耽溺し、書いたものを流行作家だった父にみ
てもらって育った。四歳年上の兄ハリーのリードで独
自の空想遊びタールにもふけり、二〇歳半ばまで続け

た。三〇歳ごろから詩集を出しはじめ『Nursery Rhymes of London Town ロンドンの町の童唄』(一九一六)と『リンゴ畑のマーティン・ピピン』(二二)で作家として広く認められた。その後『イタリアののぞきめがね』(二六)、'年とったばあやのお話か' (三一)、'町かどのジム』(三四)、'ヒナギク野のマーティン・ピピン』(三七)などの作品を旺盛に生んだ。また、末弟ハーバート(バーティ)と組んでオペレッタ『*The Two Bouquets* ふたつの花束』(三八)、バントマイム『ガラスのく』(四四)、児童劇『銀のシギ』(四八)などの演劇活動もした。晩年七四歳でそれまでの作品の自選集『ムギと王さま』(五五)を出版、一九五六年にカーネギー賞と第一回国際アンデルセン賞を受賞。五九年にはアメリカでリジャイナ賞を受ける。最晩年のイギリス政府のデイム・オブ・ザ・ブリティッシュ・エンパイアの叙勲は辞退した。第一次大戦前後から南英サセックスの田園に魅せられ、そこで多数の有能な詩人たちと交流し、アメリカのR・フロスト、イギリスのE・トマス、D・H・ロレンス、D・ガネットなどと「自然と友情と芸術」を慈しみあった。また、詩人デ・ラ・メアを終生の友に、詩活動をした。一方情熱的なエリナーは、名は不明だが某男性との初恋をはじめ、妻子あるE・トマスと親密になり彼を愛によって詩人に育てたが、惜しくも第一次大戦で戦死。その

後教師職の妻子あるG・C・アールとずっと同棲生活を送り、子を得るが流産した。それらの喜びと恐れと悲しみはソネット集『*First and Second Love* 第一と第二の愛』(四七)に赤裸に歌われている。ほかにも情熱的恋をしている。

「ムギと王さま」おむぎと *The Little Book room* 二三

編の自選短編集。一九五五年。生命不滅への賛歌『ムギと王さま』、ナンセンス風な喜劇『月がほしいと王女さまが泣いた』、田園賛歌の『ヤング・ケート』、風刺的『名のない花』、寓話『金魚』、奇跡譚『貧しい島の奇跡』など実に多種多彩な作品が収められているが、少年像を写実した『十円ぶん』、アイルランド人の途方もない空想性を描いた『コネマラのロバ』、老いの本質に迫った『ねんねこはおどる』の三編がストーリーの完結度でとくに傑出している。

(吉田新一)

フアーストブック *first book* 子どもがはじめて出会う本として絵本を位置づける見方があるが、その中で〇・二歳にかけての発達初期の子どもにふさわしい形式と内容を備えた絵本である。我が国では、「赤ちゃん絵本」という呼び名も使用されている。これまで、この種の絵本は、まだ文字の読めない子どもが見る玩具性の高いものとみなされた面もあったが、絵をじつと見たり、知ったものの名前を言ったり、指したりする活動にみられるように絵本を通して身のまわりのも

のを認識していく営みや、読み聞かせなど大人の働きかけに応じて成立するコミュニケーションの在り方など、この期の絵本の果たす役割が注目されてきている。我が国では、ブルーナの絵本の紹介(一九六四)以来、小さい四角の判型、輪郭線のある単純な形、明るい色彩が特色として捉えられている。そして、日本の子どもの生活を踏まえた出版が続き、絵本の享受年齢を大きく広げている。

(中村悦子)

ファールブル ジャン＝アンリ Jean-Henri Fabre
一八二三—一九一五 フランスの昆虫学者。南仏の寒村サン・レオンの貧農の家に生まれる。苦学してアヴィニヨンの師範学校に学び首席で卒業。郷里で小学校教員として勤務のち、コルシカ島の首都アジャクシオのリセ、アヴィニヨンの師範学校の教員を歴任、その間、植物学者、M・タンド、医師で生物学者のデュフルの影響を受け昆虫の研究を生涯の目標とすることになる。当時の昆虫研究は、形態について解剖によって身体各部を調べて分類することに主眼が置かれていた。一言でいえば、死んだ昆虫の研究である。それに対して、ファールブルはデュフルに触発されて生きた昆虫を観察しその習性と本能の解明を目的とした。一八七一年、研究に専念するために教職を離れ、生計の資を得るために子ども向けの自然科学の入門書を書き、『La Terre 地球』『La Chimie de l'Oncle Paul

ポール叔父さんの化学』など約一〇冊を世に送った。七九年には、オランジュの近郊セリニアン村に隠棲し研究と大著『昆虫記』の執筆に専念した。そのため、『セリニアン村の隠者』と呼ばれた。『昆虫記』は三〇年の歳月をかけて一九一〇年に完成。その内容は蜂を中心にした昆虫の観察記録を、『昆虫のウェルギリウス』と異名をとったほどの詩的文章で表現しているほか、人生観、思い出を織り込み自伝の要素があり、動物文学の名作とされている。編中の『蟬』の章では、ラ・フォンテーヌの寓話集の中の有名な、『セミとアリ』について、セミの習性から冬は地中にいること、食物を他に求めないことをあげてセミを知らない詩人の偽りの詩であると批判して興味深い。

(塚原亮二)

ファーマー ペネロピ Penelope Farmer 一九三九—
イギリスの児童文学作家。イングランド南部ケントに生まれる。オックスフォード大学で歴史学を専攻。二度結婚し、はじめの結婚で二人の子どもをもうけた。幼いころから文章を書くことが好きで、学生のころ書いた短編小説が出版されて子ども向けの本の依頼を受けた。幻想的雰囲気のある『内的ファンタジー』(ペギー・ヒークス)を書くが、代表作は『骨の城』(一九七二)、また『夏の小鳥たち』(六二)はカーネギー賞次点作。

(酒井邦秀)

ファンタジー fantasy 児童文学の領域でこの

とばが用いられる場合、各国の伝承文学の中に見いだされる驚異の物語としての妖精物語その他と区別し、個人の作家によって書かれた、通常は超自然的なあるいは非現実的な要素を含む物語を指す。ヨーロッパでは一八世紀の末になって、合理主義的精神への反発から、神秘的なもの、不思議なものをあこがれるロマン主義の文学が生まれたが、その潮流の中で、とくに伝承文学の一形態である妖精物語に人々の関心が寄せられるようになってその収集がはじまり、とくにグリムの童話集に代表されるように、本来は子どものものではなかった物語が児童向きに出版されることが一般化した。アンデルセンはこのような文学風土の中に現れ、伝承文学の再話と並んで、独自の空想物語を子どものために書き、近代児童文学の先駆者であり、ファンタジーの先駆者ともなつて、各国のファンタジーに大きな影響を与えた。伝統的妖精物語を下敷きにしながら新しい驚異の物語をつくるという傾向はその後約半世紀続いたが、ルイス・キャロルはナンセンスの論理によって構築された異次元の世界の驚異の物語『ふしぎの国のアリス』(一八六五)を書いて歴史に新局面を拓いた。この物語は、現実を支配する論理から全く自由であったが、世紀末に現れたネズビットの『砂の妖精』(一九〇二)は現実世界で驚異が経験されるいわゆるエヴァディ・マジックの物語であり、以後この種のファ

ンタジーが多くなった。しかし現実性が濃厚になるにつれて、ファンタジーの特質であり存在理由でもある驚異の実現が困難となつてきたため第二次大戦後の作家たちはその打開策として再び伝承文学と接触しはじめた。ガーナー、ライトソンなどがその好例である。概観してファンタジーの優れた作品が多いのは英語圏および北欧の児童文学である。(猪熊葉子)

フアンチユツリ ジュゼッペ Giuseppe Fancilli
一八八一—一九五一 イタリアの児童文学作家。フィレンツェに生まれ、大学で心理学を専攻したのち、ヴァンバの『日曜新聞』の編集に携わつて児童文学に専念するようになった。代表作『少女リザ・ベッタ』(一九三二)、『スメラルダ号の冒険』(三四)などのほか、数多くの幼年向けの童話も書いた。また、『Letteratura per l'infanzia 児童文学』(二七)や、『Scrittori e libri per l'infanzia 子どものための作家と作品』(四七)などの研究著作もある。(安藤美紀夫)

フィクション fiction 本来は事実に対するものとしての虚構、つくりごとを意味するが、文学的には事実(現実)の最も本質的な姿を提示する目的で、ありうべき現実を虚構したものを指し、その意味ではフィクションは小説それ自体を指す。小説は言語で成り立つており作品世界を支配するのは現実の因果関係ではなく言語の法則である。作家は比喩、象徴、アイロニー、

暗示などの手法を駆使して、虚構の物語空間を紡ぎ出そうとする。

(石沢小枝子)

フィッツシャー ハンス エーリヒ Hans Erich Fischer 一九〇九～五八 スイスのイラストレーター、絵本作家。エッチング、石版画、戯画および絵本の作画で、世界的な名声を得た。とくに動物描写に優れ、グリム童話『ブレーメンの楽隊』(一九四四)や、ペロ童話『長靴をはいた猫』(五七)は、世界の絵本の歴史中、重要な位置を占めている。自作絵本『たんじょうび』(四七)、『いねこのびっち』(四八)も、今日なお子どもたちに愛されている。

(佐藤真理子)

フィッツシャー マージェリー Margery Fisher 一九一三～ イギリスの児童文学評論家。オックスフォード大学を卒業。教師、作家の経験ののち、児童図書の評論を主にする。拔群な批評眼とバランスある展望で定評ある現代イギリス児童文学論『*Intent upon Reading* 読み耽る』(一九六二)、『同ノンフィクション論』『*Matters of Fact* 事実在即す』(七二)、『同冒險物語論』『*The Bright Face of Danger* 危険の利発な』(八六)のほかに、『*Who's who in Children's Books* 児童文学作中人物事典』(七五)と、単独で執筆・編集・発行している児童文学書評誌『*グロージング・ポイント*』(六二)などがある。

フィッツヒュー ルイーズ Louise Fitzhugh 一九

二八～七四 アメリカの児童文学作家。ニューヨークで教育を受け、画も学んだ。『*Harriet the Spy* スパイのハリエット』(一九六四)で児童文学史上忘れ難い女の子像ハリエットを描き、一躍有名になる。続編『*The Long Secret* それは秘密』(六五)、『*Nobody's Family is Going to Change* いっだってみんな』(七四)などわずか五作品のすべてに、人間の存在の面白みを熟知した作家の深いまなざしが感じられる。四六歳で惜しくも他界。

(島 式子)

フィッツソン ジョーン Joan Phipson 一九二一～ オーストラリアの児童文学作家。初期の作品群『*Good Luck to the Rider* 騎手に幸運を』(一九五三)や『*The Boundary Riders* 牧場境界柵を直す子供達』(六二)では牧場の子どもたちの生活を描き、『*The Way Home* 帰る道』(七二)、『*The Cats* 猫』(七六)、『*The Bird Smuggler* 野鳥密輸入』(七九)、『*The Watcher in the Garden* 庭の番人』(八二)では物質文明に毒され、自然を忘れた現代人への警告がテーマとなっている。多作な作家で、二五冊あまり発表している。

(牟田おりえ)

フィリップ シャルル＝ルイ Charles-Louis Philippe 一八七四～一九〇九 フランスの小説家。木靴工の家に生まれる。高等理工科学校入学を志望、パリに出るが挫折、文学の道に入り、勤めのかたわら雑

誌や新聞に小説を発表した。第一創作集『四つの哀しい恋物語』（一八九七）、代表作『ビュビュ・ド・モンパルナス』（一九〇二）などがある。下層社会の人々の生活を描き出し、ポピュリズムの先駆者といわれる。「マタン」紙に載せたコントを集めた『小さな町にて』（一九〇）、『朝のコント』（一九〇）には町の子どものたちの日常がよくみつけられた話編がいくつもあり、大正期以降成人向けにフィリップの作品が紹介されるとともに、小牧近江、淀野隆三らにより児童向けの雑誌や全集の中にそれらが訳され、戦後に至っている。また新美南吉は随筆中で自ら傾倒していたことを述べているが、少年心理の描写などの影響関係も考えられるだろう。

（佐藤宗子）

フィンガー チャールズ Charles Finger 一八六九—一九四一 アメリカの作家、児童文学作家。代表作『銀の国の昔話集』（一九二四）により、翌一九二五年、ニューベリー児童文学賞を受賞した。これは、南米原住民の昔話一九編を再話したもので、珍しいジャングルの伝説、海の住民や妖精族が登場する物語などから成り、ファンタスティックできらびやかな雰囲気の評判を呼んだ。もとの語り手の語り口を巧みに生かしたものととても貴重である。

（三宅忠明）

フェアマン ビリー Willi Fahrman 一九二九—西ドイツの児童文学作家、視学官。大戦末期の混乱を

描いた『Das Jahr der Wölfe 狼の年』（一九六二）がデビュー作。ユダヤ人の迫害を描いた『隣の家の出来事』（六八）によって日本に知られた。『Kristina, vergiß nicht... クリスティーナ忘れてはくけない』（七四）は、大戦後異国に残留した子どもたちの帰国を描いたもの。大工としてアメリカへ渡った移民の暮らしを描く『Der lange Weg des Lukas B ルーカスBの長い道』（八〇）でドイツ児童文学賞を得た。

（野村 滋）

フェヌロン フランソワ・ド・サリニャック・ド・ラ・モット François de Salgnac de la Mothe Fénelon 一六五一—一七一五 フランスの司祭、教育家、作家。貴族の夫人の要請で、『女子教育論』（一六八四）を書き、教育者としての優れた素質が認められて一六八九年、王太孫ブルゴーニュ公の教育係に任命される。頭はよいが短気で高慢な七歳の王太孫のために、

*ギリシア神話やラ・フォンテーヌの寓話を聞かせる。

教育における物語の効果を重視し、自身も寓話や物語を書いた。中でも有名なのが『テレマックの冒険』（九九）で、ギリシア叙事詩のような神話的英雄物語である。児童文学としては『父探しの旅や冒険を通して、人生を学び、知恵ある大人の庇護勧告からさまざまな教育を受けるところが評価されよう。実際は一種のモデル小説で、ルイ一四世の圧政を批判する痛烈な風刺作品として王の怒りを買ひ、追放される。貧困や戦争

を憂い、人民の幸せを願い、孤独の中で死去。

(末松水海子)

フェラリミークラ ヴェーラ Vera Ferra-Mikura
一九二二ー オーストリアの児童文学作家、小説家、詩人。第二次世界大戦直後から大人向けの小説や詩のほかに子ども向けの作品も創作。『かみ舟のふしぎな旅』(一九六二)、『はらぺこのえんそく』(六三)など、三人のシユタニスラウスを主人公とした、一連の、独特の空想や情緒に富んだ童話や児童詩集『*Lustig singt die Regenonne* 天水おけのゆかいな歌』(六四)を発表して一躍有名になった。(中村浩三)

フォシエ ポール Paul Faucher 一八九八ー一九六七 フランスの教育者、出版人。通称ペール・カストール。今世紀のはじめ、権威主義的教育を批判する新教育運動が起こるが、彼はフランスにおけるその中心人物。チェコスロバキアのフランチセク・バクレの影響を受けて、一九三一年から幼い子どものための絵本叢書、『ペール・カストール叢書』を出しはじめる。

『ペール・カストール叢書』の特徴の一つは、創造的手作業が子どもの精神を生き生きとさせるという理念によってつくられた工作絵本で、この分野ではナタリー・パレンの仕事が優れている。二つ目は大自然の不思議に触れさせる目的のもので、夫人のリダ・フォシエと画家ロジャンコフスキーのコンビの『動物のロ

マン』シリーズがよい例である。三つ目は『地球の子どもたち』のようにさまざまな文化圏の人間の営みに目を向けさせようというもので、ここではP・E・ウィクトールの『*Apostich, le petit flocon de neige* 雪の子、アプトシアク』がみごとである。『ペール・カストール叢書』はペール・カストールの死後は息子のフランソワが後を受け継ぎ、今日までに六〇〇タイトルを越す優れた絵本を出している。(石沢小枝子)

フォシエ リダ Lida Faucher 一八九九ー一九五五 フランスの絵本作家。プラハで生まれ、ハンディキャップのある子どもたちの教育に身を挺し、バクレやハヴラネクのもとで協力者として働く。プラハを訪れたポール・フォシエと知り合い結婚、フランスへ渡る。同じくフォシエの見いだしたロシア生まれの画家ロジャンコフスキーとコンビで『ペール・カストール叢書』に『*Panache, l'écreuil* リスのパナシ』、『うさぎのフルー』をはじめとする「動物のロマン」シリーズを書き、才能を発揮する。(石沢小枝子)

フォックス ポーラ Paula Fox 一九二二ー アメリカの児童文学作家。少年を通して奴隷船での虐待を描いた歴史小説『*The Slave Dancer* 奴隷の踊り子』(一九七三)で、ニューベリー賞を受けたが、むしろその本領は、日本でも広く読まれた『*Bloofish* Live in the Sea フグは海に』(六七)や、『*Blowfish* Live in the Sea フグは海に

住む』(七〇)など、日常生活の中で孤立した子どもを陰影をもって心理的に描いた作品群にある。疎外感をもった主人公たちが、日常とは異質な経験を経て自己を確立し、他者を認めつつ、コミュニケーションを回復していく心の旅が描かれる。一九七六年に、国際アンデルセン賞を受ける。(原 昌)

フオーブス エスター Esther Forbes 一八九一、一九六七 マサチューセッツ生まれの、アメリカの作家。歴史、伝記作家として有名。一九四二年には『Paul Revere and the World He Lived In ある人生』でピューリッツァー賞を受けている。『Johnny Tremain ジョニー・トリメイン』は唯一の子どもの本。フオーブスは巧みな人物描写とプロットを配しながら、一人の少年の個人史と一七七〇年当時のボストンを中心とした歴史をめぐりに展開した。ニューベリー賞受賞。歴史物語の古典として高く評価されている。(島 式子)

深沢紅子 ふかざわ こうじ 一九〇三(明36) 洋画家、童画家。盛岡市に生まれ、一九一九年女子美術学校に入学。二八年より『子供之友』に童画を執筆、繊細抒情的表現により注目を浴び、三〇年絵本『よいこちゃん日記』^{*}異聖歌との絵本数冊。戦後は石井桃子との絵本数冊があるが、詩集、随筆などの装丁も三〇〇冊ほどがある。二五年二科展初入選。三六年一水会創立に参加、現在同会常任委員、女流画家協会委員。夫深沢

省三とともに日本児童文芸家協会による児童文化功勞者として表彰された。随筆集『絵のある詩集』(一九七四)、『追憶の詩人たち』(七九)などがある。(久保雅男)

深沢省三 ふかざわ しょうぞう 一八九九(明32) 洋画家、童画家。盛岡市に生まれ、一九一八年東京美術学校に入学。二〇年帝展初入選。一九年より『赤い鳥』に執筆、近代童画揺籃期のホープとして活躍。二七年、日本童画家協会の創立に参加。『コドモノクニ』^{*}「子供之友」に毎月執筆。三八・四五年蒙古滞在、蒙古中国連合展を創始、制作と指導。戦後二〇年間盛岡在住、盛岡工芸、同短大、岩手大学教授として美術指導。その間偕成社ほかの絵本多数を執筆。妻深沢紅子とともに日本児童文芸家協会による児童文化功勞者として表彰された(一九五〇)。(久保雅男)

深田久弥 ふかた ひさや 一九〇三(明36) 昭46 小説家、山岳紀行家。石川県生まれ。児童文学作家の北畠八穂は最初の夫人。東京大学在学中に発表した『オロツコの娘』(一九三〇)が好評を得て、大学を中退して作家生活に入る。中学時代から登山を好んだ深田は、『贗作家故郷へ行く』(五七)を最後に小説の筆を折り、以後山岳関係を主に執筆。児童文学作品は、少年部隊の活躍を描いた『少年部隊』(四二)のほかに、少女小説『をとめだより』(四三)、少年小説『地球儀を持った少年たち』(四四)がある。(五十嵐康夫)

深谷美保子 ふかや みほこ

落谷虹児 こうじ 一八九八—一九七九(明31—昭54)

画家、詩人。本名一男。新潟県に生まれる。一九一五年上京すると、尾竹竹坡の門弟となる。二〇年ごろから「少女画報」の挿絵を描く。日本画の線描を生かした繊細で優美な独得の画風は、モダンなエキゾチズムに支えられて、甘く清純な美人画を生み出し、多くの若い女性や少女たちの夢をかきたてた。竹久夢二が世を去ったあと、抒情的な美人画家として迎えられ、人気を一身に集めたが、「婦人画報」の口絵や、吉屋信子の『花物語』など、流行の最先端の中に求められた精神構造に、まさに一致する画風だった。自作の挿絵入りの抒情詩集『孤り星』(一九三三)、『水蓮の夢』(二四)、『悲しき微笑』(同上)がある。童謡『花嫁人形』はアメリカ映画の中でも取りあげられ、外国でもレコー

ドに吹きこまれた。二五—二九年まで滞仏、サロン・ドートンヌなど三回入選。自伝小説『花嫁人形』(六七)、画集『落谷虹児抒情画集』(六八)などがある。八七年郷里新発田市に記念館設立。
(浜田けい子)

武俠世界 ぶきやう 一九一二年(明45)一月、武俠世界社が刊行した青少年向け月刊誌で、二三年三月、第一二巻第四号まで確認されているが、終刊は未詳。主筆は押川春浪であった。春浪は、博文館の青少年向け月刊誌「冒險世界」の主筆であったが、社の経営方針に入れられず退社し、「武俠世界」を創刊した。したがって、小杉未醒ら、春浪と志を同じくする友人が編集にも参画し武俠小説を中心に、青少年の啓蒙論説を多く掲載し、国権的ナショナリズムの香りが強い雑誌となった。春浪は同誌に『武力探偵小説世界の巨盜』『武俠探偵小説大奈勃翁の金冠』『怪奇冒險小説海底宝窟』などを掲載して人気を集めた。執筆陣には、三津木春影、堀内新泉、平井晩村らがいたが、一四年一月に押川春浪が歿すると、武俠小説の傑作も少なくなり、大正デモクラシーの時代背景もあって、しだいに勢いを弱め、「少年倶楽部」への過渡的役割を果たしたにとどまった。
(二上洋二)

福井英一 ふくい いち 一九二—一五四(大10—昭29) 漫画家。東京都に生まれ、郁文館中学校卒業。アニメーションの制作、「少年倶楽部」の投稿を経て、戦後『パッ

トくん(井上一雄)を代筆。その後少年誌に『ドンマイくん』『イガグリくん』(一九五二)、『赤銅鈴之助』(五四、一回のみ)など、武道を通じて成長する少年をテーマとした、熱血漫画を数多く描いた。^{*}手塚治虫のストーリー漫画の技法を、骨太の画風にミックスした点にその特色がある。

(竹内オサム)

福井研介 けんけい ふくい 一九〇八(明治四十一)ソビエ

ト児童文学者、童謡詩人。岡山県に生まれる。東京外国語学校露語科卒業。主な訳書に、いたずらっ子の少年がクラスの仲間たちといっしょに生き生きと成長していく、ソビエトの特徴的な学校物語、ノースフの『ヴィーチャと学校友だち』(一九五四)やルイバコフの『クローシの冒険』(六四)などがある。『赤い鳥』の童謡『小松姫松』(二六)、『つつましい秋』(二七)の作者でもある。

(北畑静子)

福井直秋 なおき ふくい 一八七七―一九六三(明治三十四―昭三十八)

音楽教育家。富山県生まれ。一九〇二年、東京音楽学校甲種師範科卒業。その年から富山、長野、小倉、東京青山の各師範および東京府立三中で、二十数年教鞭を執る。その間新しく「ドレミ唱法」の実践、ドイツ原書による『初等声学』(一九〇五)、代表著作の『和声学教科書』(二二)、『音程教本伴奏譜』(二四)、『師範学校楽典教本』(一五)などを著し、明治から昭和にかけて音楽教育界に新しい指導法を進めた。二九年武蔵野

音楽学校を創立、私学による多数の音楽家、音楽教師育成の道を開いた。また学校唱歌中に作曲作品が多く使用されている。

(河村順子)

福澤諭吉 ふくざわ ゆきちか 一八三四―一九〇二(天保五―明治三十四)

啓蒙思想家、教育者、新聞発行者。豊前中津藩士福澤百助の二男として、大阪中津藩蔵屋敷に生まれる。緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、一八五八年(安政五)、江戸中津藩中屋敷に蘭学塾を開く。今日の慶応義塾のはじまりである。六〇年咸臨丸で米国を訪ね、六二年遣欧使節随員として欧州諸国を歴訪。帰国後、日本人の啓蒙を志し、『西洋事情』『学問ノス、メ』『文明論之概略』などの著作を次々に発表。八二年、日刊新聞『時事新報』を発刊。政府、反政府のどちら側でもない、真の意味で日本のためによかれと信じる言論活動を展開し続けた。諭吉の子どものための著作活動は古く、『訓蒙窮理図解』(二八六八)、『世界国尽』(六九)、『啓蒙手習之文』(七一)、『学問ノス、メ』(七二)、『童蒙教草』(七二)、『文字之教』(七三)ほかがある。西洋の科学を取り入れることを説き、口語の語彙を駆使したやさしい文体系は画期的であった。

(桑原三郎)

福島正実 まさみ ふくしま 一九二九―七六(昭四―昭五十一) 作家、翻訳家、編集者。本名加藤正実。サハリン(樺太)生

まれ、幼時は中国東北地方、少年時は横浜、東京で育つ。明治大学文学科仏文学専攻、中退。早川書房に入

社し「SFマガジン」創刊。海外SFの紹介と日本SFの育成をした。また亀山龍樹、内田庶、光瀬龍らと少年文芸作家クラブを創設、SFを含む児童読み物の発展に努めた。SF児童文学、SF童話に『おしいれタイムマシン』、『こんや円盤がやつてくる』(一九七八)など多数。エンターテインメントであり児童文学であると高く評価される。

(北川幸比古)

福田清人

きよひと 一九〇四

(明37)

小説家、

児童文学作家、国文学者。長崎県生まれ、東京大学国文学科卒業。那須辰造、深田久弥らとの第一〇次「新思潮」以来、創作、評論、研究に多彩な活動を展開する。一九二九年東大卒業後、第一書房に入社、雑誌「セルパン」の編集長を務めるかたわら小説の習作に励む。

(西沢正太郎)

三一年第一書房退社後は創作に専念し、『河童の巣』(一九三三)、『中央線沿線』(三三)などを発表、注目される。

福田琴月

きんげつ 一八七五—一九一四(明8—大3)

大正

一方、大学卒業論文をもととした『硯友社の文学運動』(三三)を刊行、近代文学研究者としても認められる。戦後、実践女子大、立教大教授など歴任。五五年日本児童文芸家協会を創立、理事長となる。ついで浜田廣介の後を受けて会長に推され現在に及ぶ。南国の風土に

童話作家。本名喜八。大阪生まれ。大阪共立薬学校卒。一九〇二年金港堂より「少年界」「少女界」が創刊されるや森村園とともに編集記者として活躍、同社から『お伽噺十二ヶ月』(一九〇三)を出版。ほかに『新編お伽噺』(〇二)、『お伽噺いろは和歌』(〇三)、『お伽旅行世界めぐり』(〇五)、博文館から『日本武士』(一〇)や少女小説『捨児』(二二)を出し、明治児童文壇を彩った。

培われたロマンティズムへの志向は、『若草』(二三八)など多くの青春小説を生んだが、戦後はとくに児童文学の創作に傾注。『岬の少年たち』(四七)をはじめ、自伝風の長編三部作『春の目玉』(六三) 国際アンデルセン

賞国内賞)、『秋の目玉』(六六 野間児童文芸賞)、『暁の目玉』(六八)の結晶をみる。『夢をはこぶ船』(六九)、『ざしきぼっこ物語』(七一)、『さばくの王子』(七二)など、童話風の長編もある。また、国文学者としての深い歴史への関心は、少女少女歴史小説への道を拓き、『天平の少年』(五八)を生み、やがて郷土に取材した『長崎キリシタン物語』(七八)ともにサンケイ児童出版文化賞)、『天正少年使節』(八三)などの長編を打ち出す。「児童たちに楽しさのうちにその魂に美を点じ、夢や勇気を植えたかった」という人間の原点回帰の願いを込め、広い視野から児童文壇に物語性の回復をもたらした功績は大きい。

福田庄助

ふくだ しょうすけ

一九三三

(昭8)

絵本作家。東京出身。一九五八年ごろより絵本の仕事をはじめ、処女作は、『おひさまいねむり』(一九六二)。独学

(福田清人)

で絵の世界を築きあげたといわれ、その画風は、力強い大胆な筆致とともに、墨の線描を基調にしながら、布に描いてにじみの効果を出す技法がよく用いられる。その作風から民話および民話風創作絵本の仕事が多いが、現代児童文学作品の挿絵も手がけている。絵本画家として『百羽のつる』（六五）、『そんごくう』（六六）で小学館絵画賞を受賞している。

福田新生

ふくだ
しんせい

（中村悦子）

福田和禾子

ふくだ
わかし

一九四一（昭和16） 作曲家。

東京芸術大学作曲科卒。子どもの歌の分野では、中田喜直、湯山昭などの次の世代に位置する作曲家で、昭和四〇年代半ばからNHKの『おかあさんといっしょ』、『みんなのうた』を中心に、数多くの幼児・子ども向けの作品を発表した。作詞家井出隆夫とのコンビによる創作にヒット曲が多い。主要作品には、『そうだったらいいのにな』、『あきのこびととオータムタム』、『北風小僧の勤太郎』などがある。（後藤田純生）

副読本

はふんどく

副読本は、正規の教科書以外の教材

用図書の総称。国語教育においては補助教材や発展教材、あるいは読書指導や*文学教育などの教材とする、童話・小説・詩歌や記録・説明・論説などを編集した補充読本、課外読本、文芸読本などが、大正中期から盛んになった。中学校以上においては一般図書を副読本として利用することもある。現在の教科書検定制度のもとでは、教科書教材はさまざまな規制を受けざるをえない。副読本の使用も、届け出ることで、より一層優れた読み物を児童・生徒に読ませたいという教育的良心のもとに、作品本位で編集され、優れた読み物教材集となっているものが多い。また、地方によつては、その地方にゆかりのある民話や文学作品、さらには戦中・戦後の記録などを盛り込んだ読み物集を副読本として編集あるいは採用して、地域に根ざした教育を進める上で効果をあげているところがある。

（田近洵二）

福永恭助

きよなが
すけ

一八八九—一九七一（明治22—昭和46）

小説家、国字国語問題研究家。東京生まれ。海軍兵学校卒。海軍少佐で退官するまでの軍隊体験に材を取った戦記小説、海洋小説を、一九二八年から「少年倶楽部」に発表。著書に、『南進竜王丸』（一九四二）、

『親鷲子鷲』(四一)、『潜水艦読本』(四二)などがある。創作のかたわら国字国語の問題にも強い関心を示し、その運動に携わった。この方面の著書に、共著『口語辞典』(三九)などがある。

(五十嵐康夫)

武勳詩

ぶくんし

フランス中世の叙事詩。八・九世紀の

シャルルマーニュ大帝、ルイ三世を中心とした史実、伝説に題材を取った語り物文芸をChanson de gesteといい、武勳詩、武功史詩などと訳される。今日八〇種の写本による作品が残存している。中では『王のジェスト』に分類される、七七八年に行われたシャルルマーニュ大帝の異教徒の国スペイン遠征の史実をもとに勇士ローランら一二将士のスペイン国境ロンスボーにおける壮烈な戦死と重臣ガヌロンの裏切りを描いた『ローランの歌』が最も有名である。大道芸人のジョングルールによって巡礼の宿場などの人の多く集まる場所でヴィエール琴の伴奏で語られた。武勳詩の起源については諸説があって確定していない。(塚原亮一)

フケー フリードリヒ ドラモット Friedrich

de la Motte Fouqué 一七七〇—一八四三 ドイツの作家。

フランスの亡命貴族の出で、ブランデンブルク生まれ。古いゲルマン伝説を素材にした作品が多い。代表作は、騎士の愛を受けて魂を得た水の精の哀切な物語『ウンディーネ』(一八一二)。この作品は後期ロマン主義文学の傑作の一つに数えられ、現代まで広く読み

継がれている。ほかに、『Die kleinen Leute 小やき者たち』(一六—一七)などの童話や『Gespenstersagen und Rittersgeschichten 怪奇伝説と騎士物語集』(一九二二)などがある。

(川西美沙)

富山房

はふざん

一八八六年(明治一九)三月創立。創業者坂

本嘉治馬。当初は古本の売買、原書および翻訳書の小売りであった。はじめての出版は天野為之『経済原論』(一八八六)。ほかに歴史、地理の中等教科書を発行する。日露戦争を機に『大日本地名辞典』(九五)、『日本家庭百科事典』(一九〇六)を刊行する。明治末から大正期にかけては雑誌の創刊と辞典類の刊行に力を注ぐ。その中で雑誌『学生』(二〇)は大町桂月を主筆に迎え、科学、歴史、文学の分野で新しい風味で人気を得る。翌年には雑誌『新日本』(二二)を大隈重信の主宰によって創刊、政論、学術分野で評価を得る。大正の大震後は教育、家庭の出版に力を注ぎ、『模範家庭文庫』全二四卷(二五)、第一巻杉谷代水『アラビヤナイト』刊行。挿絵に岡本帰一^{*}を起用、児童ものの出版に新風を投げかける。その後、楠山正雄編集による『画とお話の本』全六冊(二五)がスタートする。その後も多分野(教育、歴史、文学など)にわたって今なお出版活動が続けており、一九七〇年代以降は欧米の絵本の翻訳・出版に力を入れ、また創作絵本の創出にも意欲を燃やしている。

(伊藤元雄)

藤井清水 ふじい きよみ 一八八九—一九四四(明22—昭19) 作

曲家、日本民謡研究家。呉市に生まれ、一九一六年、東京音楽学校卒業。兄一馬の影響を受けて中学時代からバイオリン、義太夫三味線、琴などを独習し、作曲もはじめており、のちの日本技法による歌曲作曲第一人者という活躍につながったといわれる。一八年小倉高女教諭に就任、そのころの創作曲を各地で演奏し好評を博した。二〇年ドイツから帰朝の山田耕筰は「自分がドイツで研究したことを、藤井君は日本にいながら習得した」と評し、その推薦でセノオ出版社から楽譜を出版、音楽界に広く紹介された。二一年大阪市立北市民会館に転勤、二二年に友人のバリトン歌手権藤田立らと「楽浪園」を創立(のち野口雨情が同園に参加する)。歌曲『おかよ』『河原柳』、童謡『信田の藪』『母さん里』『足柄山』、新民謡『娘と船大工』『土投唄』などを発表。また、以前から手がけていた各地方の民謡採譜を、三九年から町田嘉章と共同で全国に広げたが、この仕事は四一年から、NHKからの正式の委嘱事業となり、四四年の死去まで続けられた。歿後に『日本民謡大観』関東編、東北編、中部編、他(四四—四五)にまとめられ、日本音楽研究の貴重な資料となった。

(河村順子)

藤井樹郎 ふじい じゅうろう 一九〇六—六五(明39—昭40) 詩人、教育者。本名井上明雄。山梨県鳥沢に生まれ、山

梨県都留教員養成所を出て教員となる。一九三一年ごろから東京で教職につき、江東区白河小学校校長を務めた。俳句、短歌などもつくったが、北原白秋を慕って^{*}「赤い鳥」「近代風景」に童謡を投稿し、「チチノキ」などにも参加した。童謡集『喇叭と枇杷』(一九四二)、『はるの光を待ちわびて』、童話集『ふしぎなピアノ』などがある。

藤井千秋 ふじい ちあき

(こわせたまみ)

藤井則行 ふじい のりゆき 一九三四—(昭9—) 詩人。福

井県鯖江市生まれ。福井大学教育学部卒。現在福井高校教諭。一九六四年「文芸広場」に童謡を発表、のち「ふくい童話サークル」の代表、「ゆきのみ」「果実」同人、日本児童文学者協会会員。詩集に『ゆき』(一九七〇)、『みもと』(七五)、『胎動』(八四)があり、北陸の風土に根づいた詩活動を行っている。著作には

伝記『今川節』（七二）ほかがある。

（稗田重平）

ブジェフヴァ ヤン Jan Brzechwa 一九〇〇—一九六六 詩人、風刺作家。本名ヤン・レスマン。トゥーヴィムと並んでポーランド児童文学の大御所。ユーモアと風刺に富みことは遊びにあふれ、しかもストーリー性豊かな彼の詩は大人にも愛唱されている。『Brzechwa dzieciom i dorośliom o wierszach i bajkach』、『Od basni do basni』（一九五三）、『Od basni do basni』（一九五三）（六五）など多数。また童話『そばかす先生のおしぎな学校』（四六）にはじまるクレクス先生三部作も古典として広く愛読されている。

（内田莉沙子）

武鹿悦子

ぶしか えつこ

一九二八—

（昭三）

童謡詩人、詩人、童話作家。本姓荒谷。東京都港区に生まれ、

一九四五年東京都立第八高女卒業。五一年ごろよりNHK「うたのおばさん」などに童謡を発表。「鶯の会」の会員として、阪田寛夫らの「6の会」とともに、子どもの歌の世界に新風を吹き込んだ。また、童話や絵本にも力を注いでいる。著書に童謡集『こわれたおもちゃ』（一九七五）、詩集『ねこぜんまい』（八二）、童話に『みほちゃんとうわごわごわ』（八二）、『りえの氷の旅』（八七）などがある。

（矢崎節夫）

藤蔭静枝

ふじえだ じやうえ

一八八〇—一九六六（明三十三—昭四一）

日本舞踊家。本名内田八重。藤間流から独立して藤蔭流を興した新舞踊の実践者。数多くの創作があり、初

期の『思凡』で注目され、『蛇身厭離』『蘭車一九五〇』など斬新な作風を経て、『山椒太夫譚』や『白狐の湯』で日本的な題材に取り組んだ。大正中期に勃興した童謡運動に呼応して多くの児童のための踊りをつくり、児童舞踊の発展に寄与した。一九五七年、美代枝に二世静枝を譲り、自らは静樹となった。

（桜井 勲）

プーシキン アレクサンドル・C Александр Сергеевич Пушкин 一七九九—一八三七 ロシアの作家、詩人、新しいロシア文学の創設者。デカブリストに近い関係にあった。生涯二度の流刑に遭う。その作品は初期の抒情詩やロマン主義的叙事詩『カフカズの俘虜』一八二〇—二二、『パフチサライの泉』二二などから漸次リズムへと向かった。そして一九世紀、はじめて文学上の重要な諸問題を作品化した。すなわち、歴史を動かす力としての人民（悲劇『ポリス・ゴドゥノフ』二五）、個人と国家（叙事詩『青銅の騎士』二三）、個人の諸関係は社会・環境諸関係の結果（詩小説『エウゲニー・オネギン』三三—三二）、卑賤な人間の運命（小説『ペールキン物語』三〇）、人の心を支配する金の力（小説『スペードの女王』三三）。作品はそのほか悲劇詩、愛、死などの人生の諸問題を扱った抒情詩がある。彼は人民の思想、感情の姿を理解しようとして叙事民謡的形式の作品を数多く創造した。『坊さんとその作男バルダの話』（三〇）、『サルタン王物語』（三二）、『漁師と魚の話』（三三）、

『死んだ王女と七人の勇士の物語』（三三）、『金の鶏の物語』（三四）など。彼はその作品の中で民衆が皇帝、僧侶、貴族へ抱いている敵意を天才的な鮮やかさで語り、登場する主人公は悪を憎み、行動的、積極的な性格をもっていた。

（福井研介）

藤子不二雄 ふじお 漫画家。藤本弘・一九三三（昭八）と安孫子素雄・一九三四（昭九）の二人の著作人格的合同ペンネーム。富山県高岡市に生まれる。漫画家手塚治虫に影響されて一〇代で漫画家をめざし、『天使の玉ちゃん』（一九五一「毎日小学生新聞」）でデビューした。足塚不二雄名での『最後の世界大戦』（五四）などを経て、『オバケのQ太郎』『パーマン』（六四、六七ともに「週刊少年サンデー」で生活ギャグ漫画を確立、『ドラえもん』（七〇『小学一年生』『四年生』）で子どもたちの『漫画の王様』となる。『ドラえもん』の単行本は三八巻で六千万部。また人生記録漫画『まんが道』（七〇『週刊少年チャンピオン』）は一九八六―八七年にテレビドラマ化され評価された。『藤子不二雄ランド』（八四）は二〇〇巻以上の大全集となる。

（石子 順）

藤沢衛彦

ふじさわ
もりひこ

藤城清治

せいじろ

一九二四（大13）

（大13）

画家、影

絵作家。東京生まれ。慶応大学在学中から人形劇活動をはじめ、のちに慶応幼稚舎の教師になった田中清之助らと人形劇場ジュヌ・パントルを組織し、人形劇、

影絵劇を上演(第一回公演一九四六)。ジュヌ・パントルはフランス語で「若い画家」の意。一九七三年より同名の劇団を再興、主宰している。「暮しの手帖」誌に影絵を連載(四八)することで作家としての地歩を固め、やがて「木馬座」を創設(五二・七二)、児童劇界に数々の新現象をもたらした。精力的な児童文学名作ものの劇化演出。等身大ぬいぐるみ劇・大量動員方式の木馬座ファミリー劇場、テレビ番組のキャラクターが巻き起こしたケロヨン・ブームなど。それらの功罪はともかく、藤城影絵の独特のデザイン、繊細な美しさは、観客にファンタジーへの目を開かせ、多くの影絵愛好家を生んだ。著書に『藤城清治影絵画集』(七七)、『遠い日の風景から』(八〇)、『藤城清治影絵の世界』(八三)、『藤城清治影絵劇の世界』(八六)などがある。

藤田圭雄

たまたまお

一九〇五

(明38)

童謡詩人

(加藤暁子)

教授としてハワイ大学にいく。日本児童文学者協会会長、日本童謡協会理事長。児童読み物叢書『ともだち文庫』の編集に当たり、質の高い優良図書として好評を博した。また、童謡集『ぼくは海賊』(六五)、『地球の病氣』(七五)、詩集『月の絵本』(八五)をはじめ、童謡や絵本、翻訳書がある。評論・研究に、『童謡歳時記』(六五)、『歌の中の日本語』(七〇)、『日本童謡史』I・II(七一、八四)、『解題戦後日本童謡年表』(七七)、『詩と童謡の世界』(八五)などがあり、活動分野は広いが、本領は童謡研究にある。『日本童謡史』I・IIは著者のライフ・ワークというに足る大著で、「赤い鳥」「童謡」「金の星」「チチノキ」「コドモノクニ」「コドモアサヒ」など、大正後半から終戦までの代表的な雑誌に発表された諸家の作品を、投稿家に至るまで漏れなく調べて解説、論評すると同時に、重要な作品を数多く紹介した資料集としての価値をもつ書である。この著は第一二回日本児童文学者協会賞を受賞した。(尾上尚子)

藤田ミラノ

ふじた

藤森成吉 せいじもり 一八九二—一九七七(明25—昭52)

小説家、劇作家。長野県に生まれ、東京帝国大学独文
科卒業。一九二〇年『若き日の悩み』を出版、作家的
地位を確立したが、翌年、社会主義同盟へ参加、つい
でプロレタリア文学運動へ、そして戦後は日本共産党
に入党、新日本文学会などで活躍した。戯曲に、『磔茂
左衛門』(一九二六)、『何が彼女をさうさせたか』(二七)
などの問題作がある。なお、童話集『ピオの話』(四七)
は、表題作のほか、『がみ犬』『真珠の玉』などヒュー
マニズムの横溢した一〇編を集めて、戦後初期の児童
文学の収獲とされている。
(大久保典夫)

藤森秀夫 ひでお 一八九四—一九六二(明27—昭37)

独文学者、詩人。長野県池田町に生まれる。第一高等
学校から東京大学へ進み、一九一八年独文科を卒業後、
富山高校、金沢大学、慶応大学、早稲田大学などで独
語・独文学を講じた。第一詩集『こけもも』(一九一九)
で詩壇に登場したが、童謡も書き、二〇年六月号から
二二年三月号までの「童話」に童謡を連載し、童謡欄
の選者も務めた。そのころドイツ童謡の影響でつくつ
た『めえめえ兎山羊』は、今日でも愛唱されている。

(薩摩 忠)

婦人之友社

ふじんの
ともしや

羽仁もと子主宰により、一九〇

三年(明36)、雑誌「婦人之友」の前身「家庭之友」を刊
行すべく創業された。一九〇八年に「婦人之友」と改
題され、現在に至るまで続刊されている。家庭人たる
もと子の屹然とした理想を具現するように、婦人雑誌
のほか、子どもに向け一九一四年「子供之友」が、翌
年には「新少女」が創刊された。一九二一年には、新
教育への構想が「自由学園」創設となり、出版・教育
が連動して、至高の生活が求められている。

二葉亭四迷

ふたばてい

一八六四—一九〇九(元治1—明

(皆川美恵子)

42) 小説家、翻訳家。本名長谷川辰之助。江戸の生ま
れ。東京外国語学校を経てロシア文芸に親しみ、その

翻訳および自己の創作『浮雲』（一八八七）その他を、言文一致の新しい文体をもって発表し、児童文芸を含む近代文芸の進展に大きく寄与した。文芸に飽き足らず、ロシアに渡り国際政治舞台に立とうとしたが、病死した。追憶的告白的風刺小説『平凡』（一九〇七）の愛犬ボチのくだりは、年少者向きの読み物とされる。

胡

奇

チフ

一九一八

中国の児童文学作家。江

（飛田文雄）

蘇省に生まれる。一九三九年より八路軍の宣伝活動に従事、文学とかかわりをもつ。以後、一貫して軍で文化工作に携わり、各地に従軍した体験をもとに多くの作品を書く。中でもチベットを舞台にした『五色の道』（二九五七）や『はるかなる緑の地』（二六四）は、社会主義建設をめざして反動勢力と戦うチベット族の少年たちを生き生きと描き、みずみずしい作風をよく伝えている。現在「解放軍文芸」社長。

（中島久美子）

仏教児童文学

ぶつきようし
うぶんがく

仏教児童文化団体

ぶつきようじどう
ぶんかだんたい

仏教童話全集

おつきようしゅう
わせんしゅう

一九二八年(昭三)六月か

ら二九年一月まで全一六巻。発行は雑誌「伝道」を創刊した東京鴻盟社三代目今村延雄。編者は仏教童話全集刊行会、代表萬里谷龍児。B6判、三七〇ページ前後、表紙は赤に金で象の正面。口絵・挿絵は主に藤井耕達。構成は印度編四、支那編(付朝鮮編)三、日本編三、児童劇編二、創作童話編二、創作児童劇編一、日曜学校運営など一。仏伝、仏教説話、民間説話からの再話と創作によるが、出典との詳細な対照説明は第四巻印度編四の山崎精華編著のみで、ほかは文末に明記されたものもあるが全体的統一はない。創作編中にも題材を説話に求めたものも少なくない。同刊行会は三四年から三五年に『実演仏教童話全集』を出しており、当時盛んであった仏教系日曜学校での実演・口演童話の題材を提供する目的を果たした。主な執筆者に萬里谷龍児、赤松月船、内山憲堂(憲尚)、澁川繁麿、長尾豊がいる。印度編に室生犀星の『籠から出た孔雀』、寒苦鳥『啖仙人』『忍辱仙人』も収録。(斎藤寿始)

ブックリスト

book list 所定の利用目的のために

選んだ図書を配列編成した書目のことをいう。ブックリストは「個々の文献を識別できるように書誌的事项を一定の方式で記述し配列した文献リスト」として書

誌の一種であり、二次書誌(選択書誌)に当たる。ブックリストを作成するには、目的を明らかにし、作成者の立場を明確にすることが大切である。リストには、書名、著者名、出版社、出版年など書誌的事项を記述して、個々の図書が識別できるようにすべきである。図書の選定は公平な立場で目的に合わせてできるだけ多くの図書に当たり、現物を読み、相対的に比較検討し、利用者の発達段階や読書能力に合っているかなど確かめる必要がある。また、ブックリストに編成する図書に適切な解題をつけ利用者の便利を図りたい。子どもの読書のためブックリストには、*日本子どもの本研究会編『どの本よもうかな・一九〇〇冊』(一九八七)や全国学校図書館協議会編『何をどう読ませるか』(八六)など読書教育のために編成したものがある。また、子どもたち自身に利用させることを目的に日本子どもの本研究会編『どの本よもうかな?』全三巻(小学校一・二・三年、四・五・六年、中学生)(八三)が市販されている代表的なリストである。ブックリストは学校教育の中で読書教育や利用指導の立場で各種作成されているが、公立図書館でも資料相談の目的でつくられる傾向にある。

復刻

ふくく

出版用語。原稿・書物・雑誌などの原物を、材料・印刷・製本などにおいて可能な限り再現することを目的とした出版事業で、その結果としての出

(黒沢 造)

版物を「複製版」という。かつては「複製」と呼ばれ、また「複製」の文字のあてられたこともある。印刷技術開発以前の時代には、原物に超近似のものをつくるには手仕事としての書写および描写によるほかはなかったが、近代的印刷術は写真製版による大量的な原物複製を可能とした。欧米においても日本においても、複製は、まず湮滅の度の高かった古典籍の再現にはじまり、次に近代文学のそれに移り、最後に児童文学関係の書籍や雑誌に及んだ。児童文学の複製は、日本においては、大正期の『稀書複製会叢書』（米山堂刊）中に江戸期の赤本が数種加えられたのにスタートし、第二次大戦後二〇年あまりたつてから盛んになった。すなわち、一九六八年の雑誌「赤い鳥」の複製を皮切りとして、雑誌では「少年倶楽部」（七〇、七五部分）、「少年戦旗」（七七）、「童話」（八二）、「金の星」（八三）、「おとぎの世界」（八四）などが、単行本では『名著複製日本児童文学館』一・二集（七〇、七四）、「複製絵本絵ばなし集」（七八）、アルス版『日本児童文庫』（八一）、丸善版『日本童話選集』（八二）、「複製：日本の児童文学理論」（八七）などが刊行された。欧米においても児童文学書の複製はしだいに興隆しつつあり、たとえばカナダのトロント公共図書館と日本の出版社の提携によるいわゆる「オズボーン・コレクション」の複製、ドイツと日本の出版社の提携による『ペルリン・コレクション』

の複製などが数えられる。

（宮崎芳彦）

複製絵本絵ばなし集

ふつこくえほん
えほんしゅう

江戸芝居絵の伝統

をひく明治一〇年代の小型赤本絵本から、戦後間もない安泰作画の絵本に至る八〇年間に出版された日本の代表的絵本の中から二九点、五三冊を選び、原本に忠実に複製したもの。ほるぷ出版から一九七八年（昭五三）三月、全冊セットで刊行。編集委員は瀬田貞二、鳥越信、滑川道夫、竹内栄久（梅堂国政）絵の『花咲かぢい』（一八八〇）、巖谷小波が文章を書き、岡野栄らが画をつけた『日本一ノ画噺』シリーズ、岡本帰一、初山滋作画による『ゴドモノクニ』、武井武雄作画『赤ノツボ青ノツボ』など、明治、大正、昭和の三代を風靡し、親しまれた代表作を歴史的に系統だてて編集している。すでに散逸し、幻の資料と化した絵本が多い今日、本集は日本の絵本史を研究する上でも貴重な複製本である。編集委員らの執筆による『別冊解説』は絵本史研究書としても重要。

（矢野 寛）

複製オズボーン・コレクション

ふつこくオズボーン・
コレクション

The
Osborne Collection

トロント公共図書館のオズボーン・コレクションは、イギリス児童書の稀覯本の収集で名高い。コレクションは、イギリスの図書館員E・オズボーンが一九四九年に、蔵書二〇〇〇冊を同図書館に寄贈したことに始まる。八六年現在、蔵書数一万二〇〇〇余冊。その中から、イラストレーションの

発展という視点で、チャップブック、^{*}ニューベリーの『*The History of Little Goody Two Shoes* くつ二つ物語』、^{*}コールドコット、クレイン、^{*}グリーナウエーの絵本など、三五点を厳選し、『複製世界の絵本館オズボーン・コレクション パートⅠ』（一九七九）として、また『同 パートⅡ』（八四）が、「楽しみの教育」という視点から新たに三〇点の複製を収め日本のほるぷ出版より復刻されている。各作品にはオズボーン・コレクションのスタッフによる解説もついている。日本の復刻技術の水準を示したものと、外国の児童文学研究者や絵本愛好家の評価も高い。

（桂 有子）

複製ベルリン・コレクション ふくくペルリン・コレクシオン 「ペルリン・コレクション」『Kollektion Berlin』 はドイツ国立図書館（東ドイツ）の古いドイツの子どもの本の収集を指す呼び名である。この図書館が本格的に子どもの本を集め出すのは一九世紀末からであるが、そうして集められた本も、第二次世界大戦末に散逸した。したがって現在この図書館が所有している本は、戦後になって再び集められたものである。今では、古い子どもの本の蔵書は三万八、〇〇〇冊に達し、そのうち一八六〇年以前に出版されたものが五、〇〇〇冊ある。このコレクションは絵本の収集がとりわけ優れているので、日本の復刻版（ほるぷ出版）も絵本を中心としている。ベルトウフの『子どものための絵本』（一九七二）、一九

世紀前半に活躍したホーゼマン、シュペクター、ポツツイ、ルートヴィヒ・リヒターらの絵本、ハインリヒ・^{*}ホフマンの『もじやもじやペーター』（一八四五）、^{*}ブッシュの『マックスとモーリッツのいたずら』（六五）、^{*}クライドルフの『花のメルヘン』（九八）など二七点が収められている。

（野村 滋）

ブッシュ ヴィルヘルム Wilhelm Busch 一八三〇—一九〇六 ドイツの画家で詩人。機械製造を学んだ後ジュッセルドルフ、アントワープ、ミュンヘンで画家の修業をする。「ミュンヘンの一枚絵」発行に協力（一八五九—七二）。ブッシュは完成した絵を描くとともに寸鉄人を刺すような警句詩の作者でもある。ショーペンハウアーの影響を受けた厭世思想に基づいて現実社会を鋭く批判する。H・^{*}ホフマンを先達とする絵物語でプチブル根性の俗物や、偽善者や、えせ信者などをこつぴどくやつつける。中でも『マックスとモーリッツのいたずら』（六五）は国際的に名声のある悪童物語である。『いたずらからすのハンス』（六七）や、『*Die fromme Helene* 信心深きヘレーネ』（七二）、『*Fipps der Affe* 猿のフィプス』（七九）など約六〇種の絵物語がある。どれもユーモアたっぷりであるが風刺性が強く、残酷で厭世的である。これらの絵物語は今日のコミックスの先駆けを成している。ブッシュはまた友人と協力して人形劇やオペレッタの台本を書き、自作の

詩集も出すなど、きわめて多方面に活躍した。

(植田敏郎)

フテンコ ボフタン Bohdan Butenko 一九二一、ポーランドのグラフィックアーティスト。イラスト、ポスターなどからアニメ映画まで幅広く手がけている。軽い風刺とユーモアにあふれた軽妙な画風は大人にも子どもにも愛されている。実験的な作品から漫画まで多作で、ボグラルとの共作漫画シリーズ『Gucio i Cesar グーチョとツェザル』(一九六八)や『Gobdisson ガビブーや』シリーズ(七五)は人気が高い。日本では『しずくのぼうけん』(六五 テルリコフスカ作)が知られている。

(内田莉莎子)

船木 枳郎 ふなき しろう 一九〇三―七三(明36―昭48) 児童文学評論家、研究者。本名藤一。東京に生まれる。明治薬学校中退。大正後期の雑誌『*童話』に投稿の縁で小川未明を知り師事する。一九二九年、宮原無花樹らと同人誌『童話新潮』を発刊して創作童話を書いたが、同年末小川未明を盟主にアナーキズム童話運動の団体、自由芸術家連盟(約一年で解散)を結成、その機関誌『*童話の社会』の中心的評論家となって以後、評論に転じた。戦時中は絵本編集者として過ごした。著作活動は戦後になってからで、『現代児童文学史』(一九五二)が処女出版。『小川未明童話研究』(五四)、山室静らとの共編著『現代児童文学辞典』(五八)、『日本童謡童

画史』(六七)、『石森延男―人間愛とロマン』(七四)などがある。『現代児童文学史』『小川未明童話研究』などは出版の時点で類書がなかったがその他の著書とともに主観が強く客観的分析を欠く傾向があった。

(関 英雄)

舟崎 靖子 ふなざき やすこ 一九四四―(昭19―) 作家、童謡詩人。別筆名、童謡・詩で近江靖子、小説・随筆で村上靖子。神奈川県生まれ。高校在学中より詩作、『うたう足の歌』で一九六七年度日本レコード大賞童謡賞。『トンカチと花將軍』(一九七一、*舟崎克彦共著)から創作を手がける。絵本『よいトカゲ』(八四)、幼年童話『ジロリのはさみ』(八〇)のほか、『11わる4』(八一)、『とべないカラスととばないカラス』(八四)、『あんちゃん』(八五)など日常を舞台とした作品まで幅広い。

(石井直人)

舟崎 克彦 ふなざき としひこ 一九四五―(昭20―) 作家、画家。東京池袋に生まれる。初等科より学習院に学び、同大学経済学部(専攻は経営学)卒業。高校時代から詩作をはじめ、詩集『いもむしの詩』(一九六四)、『塔は影をかばい乍ら』(七〇)がある。大学時代は柔道部主将を務め、演劇サークルの活動もある。卒業後、東京建物に勤務、不動産鑑定評価の仕事につくが、病気で退社。療養中に舟崎靖子との共著で、『トンカチと花將軍』(七一)を出版する。以後、創作では、『ぼっぺん先生の日曜

日(七三)からはじまる『ぼっぺん先生物語』が代表的。第二作『ぼっぺん先生と帰らずの沼』(七四)で、第四回赤い鳥文学賞を受賞した。長編に『ピカソ君の探偵帳』(八三)がある。幼年向けに『ぼっぺん先生のどうぶつ日記』シリーズや『せかいいちのごちそう』*(七九)などがあり、絵本に『あのこがみえる』(七九 味戸ケイコ絵)、『Qはせかいいち』(八二 橋本淳子絵)。また絵本『いぬねこはかせ』(八一)をはじめ、『もりのゆうびんきょく』(七七 舟崎靖子作)の挿絵など画家としての仕事も多才を誇る。ユーモアあふれる軽妙な語り口に、不条理の感覚をしのばせた作風だが、エッセイ集『ファンタジイの祝祭』(八一)に作者の立場はよく示されている。自伝的博物誌『雨の動物園』(七四)があり、現在も世界野生生物保護基金日本委員会会員。なお、大人向けの小説集『猿のいる風景』(八五)、『鐘は鳴り私はこの』(八六)がある。(石井直人)

富原 薫 かほら 一九〇五(明三八)昭和50 童謡作家。静岡県御殿場市生まれ。小学校教員。沼津中学校を卒業後、地元(駿東郡高根村)小学校の教員を務め、かたわら童謡を数多く作詞した。代表作の草川信曲『汽車ポッポ』は一九三九年『兵隊さんの汽車』としてヒットした作品の戦後改作版。また綴方教師としても著名で県東部地区月刊作文集『駿東文園』の編集委員長を務めた。(浜野卓也)

フブノワ ワルワラー・D Bapapa Dmirpneha
 Pychova 一八八六—一九八三 ロシアの女流画家。ペルノウォに領地をもちプーシキンと親しかった大貴族ウーリフ家出身の母(音楽家)と銀行官吏の父との間にペテルブルグ(現レーニングラード)で生まれた。同帝室美術アカデミー附属高等美術学校卒。小野俊一と結婚して日本へ渡った妹アンナの招きで母と来日。一九二二—五八年の滞在期間に、早稲田大学、東京外国語大学でロシア文学を講じ、各種版画技術を習得。二科、三科インデペンデント、個展などに出品。秋田雨雀、棟方志功ら多くの文人と交友。戦前からプーシキンを多くの挿絵によって日本に紹介したほか、マルシャークの『森は生きている』、*バウストフスキーの絵本『あなぐまのはな』を描く。帰国後スフミ、レーニングラードに住み、ピアニストの姉マリーヤ、バイオリニストの妹アンナとともにスフミのミハイロフ墓地に葬られる。グルジア共和国功労美術家、日本国勲四等宝冠章授賞。生誕百年記念展が、八七年モスクワで行われ、二〇〇〇点のコレクションが出品された。(田中かな子)

フューマン フランツ Franz Fühmann 一九二二—八四 東ドイツのジャーナリスト、作家。ソビエトでの捕虜生活後、一九五〇年ごろより、詩やエッセイで文筆家として独立。五九年に子どもの本の第一作を発表して以来、『*Androklos und der Löwe*』アンドロク

ルスとライオン』(一九六六)、『*Das hölzerne Pferd* 木馬』(六八)、『*Nibelungenlied* ニーベルンゲンの歌』(七一)など、主として、古典文学や伝説を題材とした再話もので、東ドイツ児童文学界に中心的な位置を占めていた。

(佐藤真理子)

フライシユマン シド Sid Fleischman 一九二〇ー
アメリカの児童文学作家。手品師、ジャーナリスト、大人向けのスリラー作家と職を転々とした後、一九六〇年代から児童文学に携わり、『マックブルーム』シリーズ全九巻(一九六六―八〇)や『ぼくのすてきな冒険旅行』(六三)など、娯楽性に富んだ愉快な空想物語を数多く発表している。

(早川敦子)

ブラウン ゴードン Gordon Browne 一八五八―
一九三二 イギリスのイラストレーター。ネスビットの『宝さがしの子どもたち』(一八九九)のほか、ユーイングやラングなど、ヴィクトリア朝の児童書の挿絵を多く手がけた。自作に『*Nonsense by A Nobody* 誰かさんのノンセンス』(九五)がある。ディケンズの作品の挿絵で有名な『フィズ』ことH・K・ブラウンの息子。

(早川敦子)

ブラウン マーガレット ワイズ Margaret Wise Brown 一九一〇―五二 アメリカの編集者、絵本作家。時にゴールデン・マクドナルドの筆名を用いた。一九三〇年代末から四〇年代前半にかけて、子どもの

世界の重要な様相を形象化した絵本『ちいさなとりよ』(一九五八)、とか、抽象的な概念を絵本化した『コンセプト・ブック』、『*Noisy Book* うるさいな』(三九)により絵本の世界を飛躍的に発展させた。『*The Little Island* 小さな島』(ワイズガード絵)で四七年度コールデコット賞受賞。

(金平聖之助)

ブラウン マーシャ Marcia Brown 一九一八―
アメリカの絵本作家。ニューヨーク州ロチェスターに牧師の娘として生まれ、各地を移り住んで育った。ニューヨーク州立大学卒業、高校教師となるが、絵本作家をめざして図書館員となり、アトーステューデン・ト・リーグで国吉康雄やデイヴィスに師事、また木版画も学ぶ。昔話絵本を得意とし、一作ごとに物語の雰囲気に合わせて画材や画風を変え、綿密な取材をして昔話のもつ民族性や風土的特徴をよく表す作法は定評がある。物語と挿絵の微妙な関係についての洞察力は抜群で、『シンデレラ』(一九五四)、『白鳥』(六三)の繊細華麗な表現や、『三びきのやぎのがらがらどん』(五七)、『ある日ねずみが』(六二)の力強い筆致と大胆な構図などに独特の工夫と力量が示されている。その後も写真絵本『めであるく』(七九)や『影』(八二)で意欲的表現を試みている。一九五五年『シンデレラ』、八三年『影』でコールデコット賞。

(松居 直)

フラエルマン ルヴィム・И Рувим Исаевич Фра-

ермаш 一八九一―一九七二 ソビエトの児童文学作家。白ロシア出身だが二〇代半ばにシベリアにあこがれ移り住み、長期にわたって暮らした。作品には美しくも厳しいシベリアの風土が色濃く反映している。代表作は『初恋の物語』(一九三九)。思春期の少女の揺れ動く心を抒情豊かにこまやかに描いて今もなお少女たちを惹きつけ読み継がれている。ほかに『Бабака Ту-арк ギリヤーク人ワシカ』(二四)、『Шуонспай』(三七)など。

(内田莉莎子)

フラツク マージョリー Marjorie Flack 一八九七―一九五八 アメリカの絵本作家。代表作『アンガスとあひる』(一九三〇)は、好奇心でいっぱいの子スコッチテリアが外へ出てあひるを追ひ、逆に追われて逃げ帰るという単純な物語だが、擬人化していない動物の生態そのままの行動が幼い子どもの心にぴたりと重なり、幼年絵本の古典として高く評価されている。絵も基本的にはリアリズムだが、鮮やかで明るい色彩とくつきりした輪郭線とでまとめられ、幼い読者を惹きつけるものとなっている。ほかに『アンガスとねこ』(三一)、『まいこのアンガス』(三二)、お母さんへの誕生祝いを探す子どもが、次々に身近な動物たちに出会う『おかあさんだいすき』(三三)、また、絵はクルト・ウィーゼだが、揚子江の屋形船に住むあひるの子の冒険を通じて、これもまた幼い子の心を生き生きと描いた『The

Story about Ping 平んのおはな』(三三)などがある。

(脇 明子)

フラッドベリ レイ Ray Bradbury 一九二〇―アメリカの推理小説作家。詩情あふれる火星植民の物語『火星年代記』(一九五〇)、自然に対する感動や生命の歓喜を描く『たんぽぽのお酒』(五七)などで知られる。繊細で詩的文体からなるこの作家の作品世界は、機械文明の行き過ぎを批判しながら、科学が進行しているはずの未来社会の中で豊かな人間性を確保することの尊さと、それへ向けての努力と熱意の持続性の尊さとを訴えている。

(定松 正)

フランク アンネ Anne Frank 一九二九―四五 フランクフルトのユダヤ人家庭に生まれ、ナチス政権下の一九三三年家族とオランダに亡命するが強制送還され、ベルゲン・ベルゼンの強制収容所で死亡。残された日記は、死後『アンネの日記』(一九四七)として公開され、多くの人々の胸を打った。これは恐怖と孤独の日々の記録であると同時に思春期の少女の心の成長の記録でもあるが、八六年五月、省略なしの完全版がオランダで出版され、話題を呼んだ。

(川西美沙)

フランス アナトール Anatole France 一八四四―一九二四 フランスの作家、詩人、批評家。本名アナトール・フランソア・チボー。人生の傍観者として人間を皮肉と憐憫をもって描いた。『バルタザール』(二八

八九)、『タイース』(九〇)など多くの小説があるが『わが友の書』(八五)をはじめとする自伝的追憶には幼子の視界がある。『われらの子どもたち』(八六)は流麗な名文で子どもの情景を描いたもので、モンヴェルが気品ある挿絵をつけ、珠玉の絵本とした。(石沢小枝子)

フランソワーズ Françoise Saignobosc 一八九七—一九六一 フランス人だが、作品は主にアメリカで出版した絵本作家。姓のセニヨボを省いて筆名としている。代表作『まりーちゃんとひつじ』(一九五一)は、繰り返しの多い詩のような文章と子どもの描きそうな素朴な絵とで、農村に住む幼い女の子の空想をたどったもので、数を教える絵本としても優れている。同じシリーズに『まりーちゃんとおおあめ』(二六二)などがある。(脇 明子)

ブリッグズ レイモンド Raymond Briggs 一九三四—イギリスの絵本作家。『Mother Goose Treasury マザーグース・トレジャリ』(一九六六)は、約四〇〇の伝承童謡にユーモラスな絵をちりばめたもので、ケイト・グリーンナウエー賞を獲得した。『さむがりやのサンタ』(七三)は、コマ漫画形式を用いた絵本で、やはり同じ賞を獲得。文字の全くない絵本『ゆきだるま』(七九)や、核戦争を扱った『風が吹くとき』(八二)も漫画形式で話を進めている。(田中瑞枝)

ブリッセン エドワーズ Edward Blishen 一九

二〇—イギリスの作家、児童文学評論家。三〇歳代末まで学校教師をして、評論活動に入る。『少年百科事典』(六八)や、『オックスフォード幼年詩集』(六四)を経て、カーネギー賞受賞の『海底の神』(七一 共著)や現代児童文学作家の発言を集めて編んだ『とげのあるパラダイス』(七五)などの作品がある。また『父さんごめん』(七八)をはじめとする、数巻の自伝もある。(三宅忠明・吉田新一)

フリーマン Don Freeman 一九〇八—七八 アメリカのイラストレーター。青年時代、ニューヨークでトランペット奏者しながら絵を学んだ後、しばらく新聞や雑誌に演劇関係のイラストを描いていたが、息子に絵本を描いてやって以来、その魅力に惹かれ、『くまのピーテイクン』(一九五四)、『くまのコールテンくん』(六八)など数々の絵本を発表。ヒューマンな物語と温か味のある絵は、各国で愛されている。(白井澄子)

ブリヤンツェフ ゲオルギー・M Георгий Михайлович Брянец 一九〇四—六〇 ソビエトの小説家、児童文学作家。一九二五年から五年まで軍務につくたわら第二次大戦後に作家活動を始めた。戦争中に敵陣営の後方攪乱工作に従事した体験に基づいた小説を書き、四八年から短編集『От нас никто не уйдёт』(われわれのところからど一人も行かせない)『Их было

чемiero かれらは四人であった』、中編『По ту сторону фронта 戦線の向こう側で』などを発表。晩年は、児童向け冒険小説を書いた。(中、信幸)

フリユノフ ジャン・ド Jean de Brunhoff 一八九九—一九三七 フランスの絵本作家。パリに生まれる。エコール・アルザシエヌに学ぶ。第一次大戦に出征するが戦場に到着した時に終戦となる。以後は画業に励み個性的な静物画と風景画を描くが絵本作家として才能を発揮することになった。彼の絵本の主人公ババルの誕生のいきさつには諸説があるが、彼の妻が病床にあった次男のマチュウに語って聞かせた象の活躍する自作の物語にヒントを得、さらに二人の息子のアイディアを容れてババルのキャラクターを創造したことは確かである。完成した『ババルの身の上話』の原稿を見て兄のミッシェルが、自分が編集長を務める『ジャルダン・デ・モード』社から一九三二年に刊行。こうして、人間の服を着た象のババルが子どもたちの前に登場したのである。たちまち、ババルは人気者となり、『ババルの旅行』『王様ババル』、猿を主人公とした『ゼフィールのヴァカンス』が世に送られた。次回作の『ババルと家族たち』『ババルとサンタクロース』の二巻の原稿が完成していたがそれらが子どもたちの手に渡るのを見ることなく三八歳で死去。

(塚原亮一)

フリユノフ ローラン・ド Laurent de Brunhoff 一九二五— フランスの絵本作家。ジャン・ド・ブリユノフの長男。ジャン・ド・ブリユノフの死後、長男のローランが父の後を継いでババルを子どもたちに贈り続けている。しかも、テレビアニメのような、亡父の時代には存在しなかったメディアにババルを登場させてその人気を広げている。彼は、一九四六年に『ババルとならず者のアルチュール』を刊行以来、『ババルのピクニック』『鳥の島のババル』など一七巻を世に送った。それらの中には、モノレールやパラシュート降下などが登場し、新しい時代のババルが描かれ、抽象画を学んだだけあって、絵、アイディアともに父とは違う新しい感覚を示している。(塚原亮一)

ブリンク キャロル ライリー Carol Rylie Brink 一八九五—一九八一 アメリカの作家。代表作はニューベリー賞を受賞した『風の子キャディ』(一九三五)で、ウィスコンシンの開拓者であった祖母をモデルにしている。大自然に奔放に生きる一歳代の主人公キャディに自立する現代女性への視点を与えており、オルコットの描くジョー像とともに、アメリカの家庭小説の流れの一翼を担う作品として、一九五九年にルイス・キャロル・シェルフ賞に選ばれている。

(高桑啓介)

ブリンズミード ヘスバ Hesba F.Brinsmead 一九二二— オーストラリアの児童文学作家。演劇活動

を経て、児童文学作家になる。人種問題を扱った処女作『青さぎ牧場』(一九六四)、『Beat of the City 都会の鼓動』(六六)、『A Sapphire for September 九月のサファイア』(六七)、『The Sand Forest 砂の森』(八五)は一〇代の少年少女を描いている。また、自己の子ども時代を振り返った『Long time Passing 過ぎゆくロング・タイム』(七一)、『Once There was a Swagman 昔スワッグマンがいた』(七九)がある。(牟田おりえ)

フルスト W・G・ファン デ W.G.van de Hulst 一八七九―一九六三 オランダ児童文学作家。はじめ教師、のち校長。最初の作品『Willem Wicherits ウェルム ウェイヘルツ』(一九〇七)を書いたのち、『Van een Klein meisje en een grote klok 少女と大きな時計』と『Onze Brum プラムのおじいさん』が、一九〇九年、それぞれ作品賞を与えられた。三七年、オランダのオラニエ・ナサウ勲位を授けられ、四〇年、退職したのちも多くの作品を発表している。その中には『In 't Kraaiennest カラスの巣の中で』(二四)、『In de Soete Suikerbol 甘い砂糖だま』(四七)などがある。作品の多くはエスペラント、ドイツ、スイス、ノルウェー各国語にも訳されたが、二人の兄がもち出したぬいぐるみの熊が、いろいろの冒険に遭ったあと、妹の手に無事戻ってくるという『くまのブルーーン』と『ばかな二人の子のクリスマス』(六四)の絵本は二冊とも日

本語版が出ている。

(熊倉美康)

古田足日

ふるた
たるひだ

一九二七

(昭二)

児童文学

作家、評論家。愛媛県宇摩郡川之江町(現川之江市)に生まれる。大阪外語大学ロシア語科中退(一九四八)後、早稲田大学露文科二年に編入するが、すぐに休学して愛媛県金砂中学校助教諭となる。一九五一年上京し、早大で早大童話会に入り、鳥越信、神宮輝夫、山中恒らと出会う。童話会機関誌「童苑」を「少年文学」と改題するに当たり、同会はその巻頭に「少年文学の旗の下に！」と題する、いわゆる「少年文学宣言」を発表(五三)。宣言のねらいを深めるために、意欲的に児童文学評論を書きはじめる。早大中退。五四年、鳥越、神宮、山中らと「小さい仲間の会」を結成。機関誌「小さい仲間」に、『散文性のかく得』『近代童話の崩壊』、『少年文学』に『象徴童話への疑い(一)(二)』などを発表し、尖鋭的に我が国の童話伝統批判を展開した。その後、日本児童文学者協会事務局に勤務し、主に「小さい仲間」を中心に精力的な批評活動を続け、その間に執筆した文章の一部に未発表の『さよなら未明―日本近代童話の本質』などを加えた第一評論集『現代児童文学論』(五九)を刊行。これによって日本児童文学者協会新人賞を受賞するとともに、オピニオン・リーダーとしての地位を確立した。五〇年代中ごろから七〇年代にかけての古田の評論活動はめざましく、それらは、

『児童文学の思想』(六五)、『児童文学の旗』(七〇)、『現代児童文学への視点』(八一)などにまとめられ、我が国の現代児童文学に多大な影響を及ぼした。作品には、『ぬすまれた町』(六一)、『うずしお丸の少年たち』(六二)、『宿題ひきつけ株式会社』(六六 日本児童文学者協会賞)、『海賊島探検株式会社』(七〇)、『ぼくらは機関車太陽号』(七二)などアクチュアルなテーマを追求した少年小説、『くいしんぼうのロボット』(六六)、『ロボット・カミイ』(七〇)、『おしいれのぼうけん』(七四)、『ダンプえんちようやつつけた』(七八)などの幼年童話や絵本があり、一時、山口女子大学教授を務めるなど、その活躍は多岐にわたっている。

『現代児童文学論』げんたいじどろん 評論集。一九五六年。

『少年文学宣言』を起点にして起こったさまざまな波紋に答えるとともに、そのねらいを深化するために書かれた『近代童話の崩壊』『象徴童話への疑い』などを中心に、小川未明にはじまる日本の近代童話の超克をめざした未発表の『さよなら未明』を巻頭に配した第一評論集。童話伝統批判を中心にすえた理論活動は、児童文学の現代を招来する橋頭堡となったと評価できよう。

ブルック L レズリー L. Leslie Brooke 一八六

二—一九四〇 イギリスの絵本作家、挿絵画家、画家。アイルランド系の家系に生まれる。一七歳の時イタリ

ア旅行をして美術に目覚め、ロンドンのロイヤル・アカデミー美術学校で学ぶ。肖像画家として出発するが、*ラング編『The Nursery Rhyme Book わらべ唄の本』(二八九七)の挿絵で認められ、リアのナンセンス・ソングの挿絵本(一九〇〇)の後、我が家で父から聞き、子に伝えたナンセンスな歌を絵解きした絵本『Johnny Crow's Garden からすのジョニーの庭』(〇三)を制作し代表作となる。これには姉妹編『Johnny Crow's Party からすのジョニーのパーティ』(〇七)、『Johnny Crow's New Garden からすのジョニーの新しい庭』(三五)がある。ほかに昔話集の『金のがちようのほん』(〇五)、*マザーグースの唄の絵本『Ring O' Roses ばらのわ』(二二)があるが、ともに絵でストーリーのひだをよく語り、*細部でユーモアの味付けがふんだんになされている。*コールドコットの伝統を二〇世紀に伝えた絵本作家。

ブルックナー カール Karl Bruckner 一九〇六—

オーストリアの作家。小学校卒業後、さまざまな職業を経て、第二次大戦後作家としてデビュー。家出少年を扱った『ナポリの浮浪児』(二九五五)、考古学小説『黄金のファラオ』(五七)、広島の被爆少女を主人公にした『サダコは生きたい』(六八)などで国際的に知られている。一貫した平和主義者であり、現代的な問題を提起あげた作品が多く、人間の理性や良心に訴えかけて

いる。

(佐々木田鶴子)

ブルードラ ベンノ Benno Pludra 一九二五、東ドイツの児童文学作家。下ラウジッツ地方に生まれ、ハンブルク船員学校卒業後、商船の乗組員となった。戦後、ラジオ新聞の編集者として活躍するかたわら、児童文学作家としての基礎を固めた。『Die Jungen von Zelt 13 一三番テントの少年たち』(一九五二)などの初期の作品では、主として、社会主義への移行過程の諸問題を扱ったが、のちの『Tambari タンバリ』(六九)などでは、社会主義国家における新しい人間像を描いている。

(佐藤真理子)

ブルーナ ディック Dick Bruna 一九二七、オランダの絵本作家、グラフィック・デザイナー。オランダの名門出版社 A・W・ブルーナ社の三代目社長の息子として生まれ、社業を継ぐ立場にあったが、グラフィック・デザインを志し、独自の表現スタイルを確立、本のデザインの分野で最も活躍し、認められた。

一九五三年に最初の絵本『りんご』(現在の作品の原型となった)を制作したが成功とはいえず、五九年に、現在『ブルーナの絵本』といわれる一六センチ角の正方形、堅表紙の絵本四冊を出版、六二年に『ちいさなさかな』など四冊、翌六三年に代表作の『ちいさなうさこちゃん』シリーズ四冊を出して絵本作家として世界的に評価を得た。三原色と緑を基調とした明確な色面を、暖

か味のあるフリーハンドの黒の輪郭線で分割、水平と垂直を基本とした正面性の強い構図が特徴で、テキストは単純だが語りかけるようで幼児に親しまれる。二〇カ国語に翻訳。

(松居 直)

フルニエ アラン Alain Fournier 一八八六、一九一四 フランスの小説家。本名アンリ・フルニエ。ラ・シャペル・ダンギオンに生まれる。高等師範学校の試験に失敗し、新聞記者をしたが一九一三年、雑誌『N・R・F』に『モーヌの大將』を発表、この作品は、子ども時代への郷愁、夢の世界の幻影、甘美な恋の中に絶対へのあこがれを残すネルヴァル風作品である。

(牧野文子)

ブルフィンチ トマス Thomas Bulfinch 一七九六、一八六七 アメリカの神話学者。有名な建築家チャールズ・ブルフィンチ(一七六三、一八四四)の息子としてボストンに生まれて、教師、銀行員として勤務するかたわら、世界各地の古代神話を平易な現代英語で世に広く紹介し、『神話』^{*}といえはブルフィンチと呼ばれるほどになった。晩学であった彼の最初の著作は五七歳で公にした『ヘブライの叙情詩の歴史』(一八五三)であるが、一躍その名を世に知らしめたのは、ギリシア・ローマ神話を紹介した『空想の時代』(五五)であった。ついで、アーサー王伝説、ウェールズの伝説群マビノギオン(Mabinogion)などを『騎士道の時代』

(五八)で紹介し、『中世のロマン伝説』(六三)でいわゆるブルフィンチの神話シリーズは完結した。この二冊は、早く大正初期に野上弥生子によって翻訳され、昭和期には岩波文庫に収められて広く読まれた。ブルフィンチを神話研究にかりたてたのは、生まれ故郷ボストンで教師をしていた時のことであつた。それまでギリシア・ローマ神話は、少数の古代ギリシア語およびラテン語学習者の専有物であつた。これほどの人類の文化的財宝は、できるだけ多数の人で分かち合うべきという考えが終生彼をとらえて離さなかつたのである。

(三宅忠明)

ブルーム ジュディ Judy Blume 一九二八― ニュージャージー生まれのアメリカの児童文学作家。八歳からティーンエージャーにかけての女の子が群がるといわれる作家。この年ごろの子どもの秘密を熟知しているという自信にあふれ、ストーリーは大半が一人称語り。性や家族についての悩みが常に明るく現実的に提示される。『神様、わたしマーガレットです』(一九七〇)、『カレンの日記』(七二)などを経て、『Forever』いつまでも『(七五)に至つては作品が常套的だとの非難もある。

(島 式子)

古家 新 あらたや 一八九七―一九七七(明30/昭52) 画家。別名新。明石市に生まれ、京都高等工芸学校卒業後、大阪朝日新聞社に入社、当時学芸部次長であつた

辻村秋峰に懲慥され「ゴドモアサヒ」に挿絵を書き、週刊朝日の表紙、挿絵も担当。一九二八年フランスに留学、神戸二中の後輩、小磯良平、竹中郁と交遊。全関西洋画協会、新美術家協会の会員、二科会会友に推挙され、四五年には行動美術協会結成。『子供の描く絵の導き方』(四二)、『絵をかくこともへ』(五〇)などがある。

(石沢小枝子)

古谷綱武 ふるや づなたけ 一九〇八―八四(明41/昭59) 評論家。外交官の父の任地ベルギーで生まれる。宇和島中学、青山学院を経て成城高校を中退。一九二九年(昭4)大岡昇平、中原中也、河上徹太郎らと「白痴群」を創刊。三四年(昭9)檀一雄と「鷗」を創刊。三六年作家論『横光利一』『川端康成』、評論集『批評文学』を出版。作家の内面と人間性の追求を通して、実感的でわかりやすく、また自己批評を含む啓蒙精神に裏づけされた文学論を展開した。また児童文学の分野でも、独自の視点による『児童文学の理想』(一九四二)を発表、一般文芸評論家が始めて書いた児童文学論になった。続いて『児童文学の手帖』(四八)、『宮沢賢治研究』(四八)などもあり、また女性評論では『女性のために』(四六)、『母の歴史』(六五)など多数。そのほか『暮らしのなかの人生論』(五〇)、『生きるということ』(五四)、『ぼくの日本旅行』(五四)などの文化論、人生論など、幅広い視野による評論活動を続けた。

(久保 喬)

ブルリアゲ レオンス Léonce Bourliaguet 一八九五—一九六五 フランスの児童文学作家。ドルドーニュ県のティヴィエールに生まれる。父親は靴職人。一五歳でペリグーの師範学校に入る。第一次大戦に出征し捕虜となる。この時の体験をもとにした小説を「タン」紙に発表、一〇年後にフランスで最年少の初等教育視学官となる。若い教師の指導のかたわら、学校生活に題材を取った子ども向けの作品を書き、約五〇冊を世に送った。その作品はフランス文学らしい風刺のきいたユーモアが特徴で、代表作は小学生のグループの対立を描いた『ブークとオオカミ団』（一九五五、世界の子供賞受賞）、短編寓話集『雲売り小父さん』（六〇）。（塚原亮一）

ブレイク ウィリアム William Blake 一七五七—一八二七 イギリスの詩人、画家、彫版家、神秘家。ロンドンの洋品商の子に生まれ、彫版師の徒弟となり、彫版を生涯の正業とする。貧しい中を旺盛な詩作も行い、抒情詩、思想詩、象徴詩を書き、イギリスロマン派の先駆的詩人となる。中でも『無垢の歌』（一七八九）は子どもの空想的イメージによる詩集で児童詩史の記念碑的作品。それと対『経験の歌』（九四）もつくるが、この両詩集は作者の銅板による書き文字と挿絵が渾然一体となり、また、どの版本にも異なる手彩色が施され、史上まれにみる美本。作者は中世の装飾写本に学

び、それにあやかり「採色本 (Illuminated Books)」と称し、同種の本をほかに八点つくった。その技法はドロバートが臨終の時その霊によってブレイクに教えたものといわれ、ブレイクは時に木に天使の群れを見たという神秘体験をもった。その詩画集は後世に多大の影響を残している。（吉田新一）

ブレイク クエンティン Quentin Blake 一九三二—イギリスの挿絵画家。フランス人学校の英語教師を経て「パンチ」誌の漫画欄担当。その後フリーとなり、王立芸術大などで教える。人やものの特徴や動きを的確に捉え、機知とユーモアに富む画風は高い評価を得ている。エイキンの作品の挿絵などのほかに、自らも『わらべ唄の本』（一九八三）など多数の絵本をつくる。『ミスター・マグノーリア』（八〇）でケイト・グリーナウエー賞を受ける。（藤森かよこ）

ブレイク ジャック Jacques Prévert 一九〇〇—一七七 フランスの詩人、シナリオ作家。パリ近郊に生まれる。ブルトン、エリュアールらのシュールレアリスムの運動に参加。二〇歳ごろから詩を書きはじめ、一九四六年、詩集『ことば』によって注目された。その詩の多くは作曲され、シャンソンとして愛唱されている。また、映画『天井桟敷の人々』のシナリオを書いた。児童文学作品は数少ないが、詩集『月のオペラ』、ダチョウとカモシカ、ラクダなどの動物を主人公にし

た寓話風の八短編を収録した『Contes pour enfants pas sages かしこくない子どもたちのためのコント』がある。(塚原亮二)

フリーベル フリードリヒ Friedrich Fröbel 一七八二—一八五二 ドイツロマン主義時代の教育家、幼稚園の創設者。チューリンゲンの森オーバーヴァイスバッハに牧師の子として生まれる。ペスタロッチとの出会いにより、教育事業に生涯をささげることになる。とくに幼児教育の分野において、独自の理論を展開し、「一般ドイツ幼稚園」「幼児教育者養成所」を設立するとともに、家庭、とくに母親による真の人間教育の必要性を説く。主な著書に『人間教育』(一八二六)がある。

(田中安男)

フリーベル館 フレーベル 高市次郎によつて創業された保育用品・教育玩具を製作販売する先駆的企業である。東京女高師附属幼稚園の和田實らの指導を受け、フリーベル創案の遊具を研究発売する。一九〇七年(明40)白丸屋として開店したが、翌年にはフリーベル館と社名変更した。モンテッソーリ教具、ヒル氏積木、ジャングルジム、ビスクドール、クレヨンなどを売り広めた。二七年十一月から倉橋惣三らの援助を得て、観察絵本「キンダーブック」を出版し、幼稚園教育に貢献した。

(皆川美恵子)

フレミング イアン Ian Fleming 一九〇八—六四

イギリスの作家。第二次大戦中海軍情報部の副官を務めたという経歴を生かして、ジェイムズ・ボンド、またの名を007(暗号)という主人公の活躍する、国際スパイ合戦のシリーズを書いた。長編は処女作『カジノワイヤル』(二九五三)、『死ぬのは奴らだ』(五四)、『ロシアより愛をこめて』(五七)など一二冊、ほかに短編集が二冊ある。作品は映画でも知られ、一種のヒーローものとして子ども読者にも広く読まれている。

(谷本誠剛)

ブレンターノ クレーメンス Clemens Brentano 一七七八—一八四二 ドイツ後期ロマン派の代表的抒情詩人、小説家、劇作家、民謡・童謡・童話の収集家、編集者。ハレとイエーナ大学に学ぶ。ゲーテ、シラー、ヘルダー、シュレーゲルなどと交わる。ブレンターノはたびたび居住地を変えるが、ハイデルベルク時代(一八〇六—〇八)が最も実りが多く、ハイデルベルクロマン派の代表者とみなされている。そのころアヒム・アルニムと協力して民謡集『Des Knaben Wunderhorn 少年の魔法の角笛』三卷(〇六—〇八)を編集し出版する。童謡集も付録として収められている。この本はドイツ文学にのちのちまで残る影響を与える。ブレンターノは創作力にあふれ豊富な想像力の持ち主で、そのことばと形式に音楽性がある。ドイツの中世文学、童話、伝説などを好み、それらに自分の思想を盛り込

んで改作する。童話収集ははじめブレンターノを援助したグリム兄弟によって結実する。ブレンターノは小説や劇のほかに高学年の読み物にもなっている『けなげなカスベルと美しいアンネル物語』(三八)やイタリアのバジレの『*Pentamerone* 五日物語』(三八)に基づいて書かれ、今日までよく読まれている『ゴツケル物語』(三八)も書く。死後出版された『*Marchen* 童話』二卷(四七)は珠玉の作品集で、その収入は貧しい人々と子どもたちのために用いるように遺言されている。

(植田敏郎)

プロピエール Pierre Pelot 一九四五ー フランスの児童文学作家。学校を出てから、いろいろな職につき、漫画の勉強もするが、エルジェの勧めで、小説を書きはじめる。一九六六年以来、多くの筆名でSF、推理、西部もの、放送台本を書くが、悩み多い青年期の心理、行動を描き、現代の諸問題に立ち向かった小説に傑作がある。『*Le cœur sous la cendre* 灰の下の心』(一九七六)、『*Le renard dans la maison* 家の心のきつね』(七七)は有名な賞をとり、七六年度国際アンデルセン賞にもフランスの候補に推された。

(末松永海子)

プロイスラー オットフリート Otfried Preussler 一九二三ー 西ドイツの児童文学作家。チェコスロバキアのボヘミア地方に学校教師のドイツ人の子として生

まれ、一九歳までこの地で過ごす。第二次世界大戦中ドイツ軍に入隊、五年間のソビエト軍の捕虜生活を経て、一九四九年から西ドイツのオーバーバイエルン地方に住み、小学校の教師をしながら、児童文学の創作に携わり、七〇年以降は作家活動に専念。ボヘミア地方、南ドイツ、ロシアなどの民話・伝説を素材に、豊かなユーモアや空想、確かな描写、巧みな構成であげた諸作品によって内外の多くの読者を魅了し、現代ドイツ児童文学の代表的作家となった。主な作品は『小さい水の精』(二九五六)、『小さい魔女』(五七)、『大どろぼうホッツェンプロッツ』(六二)、『大どろぼうホッツェンプロッツふたたびあらわる』(六九)、『大どろぼうホッツェンプロッツ三たびあらわる』(七三)、『小さいおばけ』(六六)、『大力のワーニャ』(六八)、『クラバート』(七二)、『小人ヘルベのぼうけん』(八二)、『小人ヘルベと大食らいのツボツテル』(八三)など。中でも、子どもの世界の優れた人間喜劇ともいえる『ホッツェンプロッツ』三部作は、戦後の幼年童話の世界的傑作。ヴェンド人(東ドイツに住むスラブ系少数民族)の伝説を素材にして、少年の愛と解放を描いた長編『クラバート』は、質量ともにプロイスラー文学の頂点を成す作品である。

(中村浩三)

フロイセン アルフ Alf Prøysen 一九一四ー七〇 ノルウェーの作家、詩人、児童文学作家。ヘデマルク

地方リングサークルの貧しい小作人の息子として生まれる。子ども時代の生活を、晩年にラジオで語り、のちに自伝的物語『*Det var da det og ikke nå* あのこと』(一九七二)として出版され、二大戦争の間の小作階級の人々の文化描写として貴重なものとなる。デビュー作品は小説『*Døstjokken heme* 戸口に』(四五)。一九四〇年代から、エグネルとともにラジオ放送子ども番組を担当し、独特の語り口で物語を語り、歌い、人々の心を捉え、のちにそれらの物語が出版され、ノルウェー児童文学界に新風を吹き込む。恵まれない生活を余儀なくさせられている人々の悲しさと憤りを知りつくし、我慢と寛容を身につけ、鋭い風刺を明るいユーモアに暖かく包み込んで、楽しく語り歌う詩人である。詩には曲がつけられ広く愛唱され、『*Museusa* ねずみのうた』(四九)のようにアメリカはかいくつかの国々に広まったものもある。児童文学の代表作に、時々体が小さくなってしまうおばさんの体験談『小さなスプーンおばさん』シリーズ全四巻(五七～六九)、短編集『しあわせなてんとうむし』(五九)、物語『*Sirkus Miketisket* きつねのサーカス』(六二)、『*Den grønne votten* みどりの手袋』(六四)などがある。七〇年に児童文学界への功績により、教会教育省より名誉賞を与えられる。ほか多数の賞を受賞する。

(山内清子)

プロコフイエヴァ ソフィヤ・П. Софья Петровна Прокофьева 一九二八、ソビエトの児童文学作家。モスクワで生まれ、スリコフ美術大学に学んだが文学の道を選んだ。一九五七年詩の形式の童話『*Kno rygge?* だれがいちばん?』を発表以来、幼年、低学年向きの童話を多数執筆している。我が国でも『黄色いかばんをおいかける』(一九六五)、『ワーシヤとまほうのもくば』(六八)などが翻訳されている。ファンタジーと現実が巧みに絡み合ったストーリーが特色。

(松谷さやか)

ブロック ヤン Jan Blokker 一九二七、中学卒業後、新聞記者見習い、映画編集者、コラムニスト、シナリオ・ライター、テレビ向けドキュメンタリー作家などを経て、成人向け作家として文壇に登場した。また、児童向けにも作品を書いており、その中には、『*Jongens helpen in de nood* 助け合う少年たち』(一九五三)、『*Avontuur in Frankrijk* フランスにごるときの冒険』(五五)、『*Het Kalekopenhuis* はげ頭の家』(七八)、『*Jeroen de Grote* イエルン・デ・フローテ』(七九)などの作品を発表している。日本では『巨人スホイフルバンド』(六〇)が翻訳出版されている。この本はオランダでは、児童文学賞を授けられており、内容は子どもたちと擬人化された草、枝、音符、眼鏡、ことばなどが、森の中で巨人と出会い冒険を重ねていく物

語。着想が奇抜で、ユーモアがあり、随所に作者の批判をのぞかせている点が光っている。(熊倉美康)

プロット plot 小説や童話などのストーリーを形づくる筋立てのことをいう。作家の日常体験や空想体験から筋立てをつくるが、それが多様で、ドラマティックであればあるほど読者の興味を引く。しかし、それのみで作品は成立せず、それをいかに効果的に組み立て、脚色するかに作家的技術が問われる。児童文学の場合、とりわけ幼年童話や絵本では単純なプロットを使うが、子どもの関心を引く話らしい話としての筋立てが重要である。(西本鶏介)

プロップ Уражиил・Я Браунип Яковлеви

Иппон 一八九五—一九七〇 ソビエトの民俗学者。ペテルブルグ(現レーニングラード)生まれ。ペテルブルグ大卒。一九二八年『昔話の形態学』を発表、魔法昔話は筋が多様で登場人物もさまざまだが、その基本的な構成は常にくつつかの似通ったモチーフによって形づけられているという考えを明らかにした。これは三〇年後はじめて、民話の構造分析の先駆的著作として世界的な反響を呼んだ。現在の言語学のあるいは構造学的な分析の試みはすべてここからはじまっているともいえる。その続編として三九年に発表された『魔法昔話の起源』は、昔話の起源が、経済的欲求を誘因とする原始的儀礼、習俗と関連があり、二つの時代、体制、

思想の矛盾と衝突から生まれるとし、先の主張を具体的に示した。その他『Русский народный эпос. Роман英雄叙事詩』(一九五五)、『ロシアの祭り』(六三)、『口承文芸と現実』(六九)、『ロシアの民話』(八四)など多数の著書、論文がある。(金光せつ)

フロム リロ Lilo Fromm 一九二八— 西ドイツの画家、イラストレーター、絵本作家。一九六七年のドイツ児童文学賞(絵本部門)およびBIB世界絵本原画展金メダルを得たグリム童話絵本『金の鳥』(一九六六)にみられるような温か味のある豊かな色彩で、高度に完成された作品から自作絵本『Muffel und Plums ムッフェルとブルムス』(七二)の機知に富む繊細な線画まで、幅広い画風をもっている。絵本のほか、ルック・ポークの『おぼけはキーキをたべない』(五九)など、多くの児童書の挿絵も手がけている。(佐藤真理子)

フロレタリア児童文学

フロレタリアヒ
どうぶんがく

階級的児童観に

立つ児童文学で、大正末から昭和初期のフロレタリア文学運動から派生した。一九二五年(大14)「無産者新聞」にヘコドモのせかい欄が設けられたのがはじまりで、二七年(昭二)には「文芸戦線」(労農芸術家連盟機関誌)に、へ小さい同志欄が設けられた。創作童話では江口渥「ある日の鬼ヶ島」(一九二七「赤い鳥」)、猪野省三「ドンドンやき」(二八「フロレタリア芸術」)などが先駆的作品だった。二八年一〇月、横本楠郎を理論的リ

ダーとするマルキシズム派と小川未明らアナーキズム派の合作で、新興童話作家連盟が反資本主義を旗印に結成され、翌年一月機関誌「童話運動」を創刊したが、三カ月で分裂、小川未明らアナキ系が脱退し、同誌は文芸誌というより児童教育文化誌の色彩を強めた。アナキ系は二九年末に小川未明を盟主に、船木枳郎らが自由芸術家連盟を結成、翌年三月機関誌「童話の社会」を創刊、反権力の自由連合社会を理想とする童話、詩、評論を発表したが連盟が瓦解して同年一月に廃刊。

一方、日本プロレタリア作家同盟は二九年五月に機関誌「戦旗」の付録として「少年戦旗」を創刊、同年末には前記「童話運動」を合併、労農大衆の子たちの教化誌として童話、読み物、漫画などを載せたが、弾圧されて三一年一〇月廃刊した。プロレタリア児童文学の主流はマルキシズムの科学的社会主義理論に立っていたが、プロレタリア文学運動全体の政治主義的偏向から、その児童文学理論は図式主義であり、童話そのほかの作品はアジ・プロ（宣伝扇動）主義の底の浅さを免れなかった。が、日本の児童文学にはじめて体系的合理的理論を導入して、後代の児童文学に多大の影響を与えた点は評価されねばならない。童話集はないが童謡集『小さい同志』（三二 横本楠郎・川崎大治編）がある。

【参考文献】『少年戦旗』全復刻版（一九七七 戦旗復刻版刊行

会、『日本の児童文学』（一九八三『菅忠道著作集』① あゆみ出版）

フロロフ ワジム Баум Фролов 一九一八 ソビエトの作家。ゴリキー市に生まれ、レニングラード大学文学部新聞学科卒業。一九六六年、従来の優等生的な児童文学に一種の怒りを覚えて、思春期の少年の物語『愛について』を書き、大きな反響を呼ぶ。劇や映画にもなった。英語、フランス語、日本語など多くの外国語にも訳され、アメリカでは児童問題研究会名誉賞を受賞した。長年新聞の編集の仕事にも従事してきた。

（北畑静子）

文学教育 ようがく 文学教育とは、戦後の昭和二〇年代に一般化した用語であって、主として、昔話・童話・小説あるいは詩歌などの文学作品の鑑賞（読みや読み聞かせ）の指導を通して、ものの見方や感じ方・考え方など、文学的認識力や想像力あるいは感受性や感情などを育てようとする教育を指す。教育内容の上から右にあげた文学的認識などを育成するのが文学教育だとすると、具体的実践としてそれは、読む・聞くの理解活動はもとより、話す・書くの表現活動の指導としてもなされることになる。すなわち、文学教育は国語教育としても重要な柱となるものであって、文学的言語活動を通しての文学言語の教育として位置づけることができる。読む領域というと、文学教育は、文学作品の

読みの成立とともにある。読みの成立なくして文学教育はない。作品の読みをないがしろにして、ものの見方や考え方などに短絡させるような指導は、徳目主義の観念的な道徳教育になる。作品のことばに即した確かな読みこそ、文学言語の教育であり、文学教育の本来的な在り方だといえよう。ところで、文学教育としての読みの指導は、到達すべき正解の読みが予定されており、習得さるべき読みの技術が先に設定されていて、そのために文学作品を道具にするといった、いわゆる技術主義的な読解指導の対極にあるものである。すなわち、文学教育は、文学作品とかわることで、一人一人が自分の作品世界をつくり出し、そこに現出した虚構世界を一つの現実として体験するといった文学体験としての読みの成立をめざして実践されなければならない。

(田近洵二)

文学教育基礎講座

○月明治図書刊。国分一太郎、関英雄、與田準一編、全三巻。第一巻『児童文学とはどんなものか』、第二巻『児童文学はどのようにつくられるか』、第三巻『児童文学をどう鑑賞するか』。児童文学の本質、創作の過程と方法、児童文学鑑賞の実際などの最も基本的、原理的なことについて平易に述べられており、児童文学基礎講座ないし入門講座といつてよい叢書。(小松崎進)

文学教材

文字によって表現された芸術作

品である小説・物語・詩・随筆・戯曲のもつ教育的機能を教育の現場に生かす試みの中で用いられる素材。狭義には、国語教科書に採用された文学作品を指すが、広義には副読本その他、教育の場で使われる文学作品をも含める。文学教材には、(1)言語を媒介として感動が成立するもの、(2)虚構の真实性が読み取れるもの、(3)文学言語の教育が可能なもの、(4)批評意識養成に役立つもの、といった条件が伴う。教育の場にもち込まれる文学作品は、そのままでは素材に過ぎず、それが教材として成立するには、教師(指導者)の事前的研究的準備が必要となる。さらには素材としてのテキストと学習者との交流(相互作用)が求められる。テキストは学習されることによって、教材としての機能を発揮する。かつての文学教材指導では、そこに作者が意図したテーマを探すが大きな比重を占め、読み手(学習者の想像力の養成や文学言語の教育は、二次的に処理されることが多かった。が、そうした文学教材指導はテーマ主義として否定され、現在は学習者の読みをより大切にする指導の方法が模索されている。現行国語教科書には、『白いぼうし』(あまんきみこ)、『雪渡り』(宮沢賢治)、『野の馬』(今江祥智)、『きつねの窓』(安房直子)など、いくつものファンタジーが採用されている。これらの作品を読むことは、楽譜を演奏するようなものであり、読み手(学習者)が読むという行為を通

して、テキストを加工・充填していくのである。読み手の主体を尊ぶこのような読者論の視点を導入する時、文学教材は学習者の中ではじめて完全なものとなる、というテーゼが生まれる。そしてここに想像力を発揮させ、テキストを多義的に読ませるという指導の立場が公認されることになる。指導者は学習者の多義的な読みを組織するのである。

【参考文献】 飛田多喜雄『国語教育方法論史』（一九六五 明治図書出版）、浜本純逸・浜本宏子編『文学教材の実践・研究文献目録』（一九八二 溪水社）、浜本純逸・森田信義・東和男編『文学教育実践史事典』（一九八三 明治図書出版）（関口安義）

文 体 ぶんたい 表現形式としての文章的特色を示すことばでスタイルともいう。作品のジャンルや作家によって文体はそれぞれに異なるが、小説や童話の文体は物語的世界を豊かにイメージできる文体かどうかによって読者への説得力に差が出てくる。童話の場合、子どもに理解できることばと表現でありながら、個性的で、読みやすく、リアリティーのある文体が要求される。文体は時代とともに変化していくが、作品の完成度を示す作者の顔でもある。（西本鶏介）

へ

ヘイエルダール トール Thor Heyerdahl 一九一四、ノルウェーの動物・人類学者。一九三七年マルキーズ諸島を訪れた際、ポリネシア民族の起源に興味を抱いた。四七年バルサ材の舟コンチキ号に仲間と乗り組み、ペルーから海流に乗ってポリネシアのトゥアモトゥ諸島に漂着、民族移動の可能性を示唆した。この冒険は『コンチキ号漂流記』（一九四八）にまとめられた。ユニークな研究方法で広く知られる。著書にはほかに『アク・アク』（五七）、『葦舟ラー号航海記』（七〇）などがある。（木村由利子）

ヘイグ・ブラウン ロデリック Roderick Haig-Brown 一九〇八、七六 カナダの作家。英国サセックスに生まれ、一八歳でカナダに移住。カナダ児童文学の重要なジャンルでそれぞれ優れた作品を残して、カナダの児童文学を確立した一人。代表作は、大自然の冒険物語では、『Starbuck Valley Winter スターバック